公益財団法人堺市文化振興財団
令和５年度「子ども食堂における芸術家派遣事業」
事業検証調査　報告書

令和６年３月

合同会社文化コモンズ研究所

目次

Ⅰ. 検証・考察 1

Ⅱ. 事業実績 5

1. 事業概要 6

2. 事業実績 7

Ⅲ. モニタリング調査 9

1. いづはまスマイル食堂 10

2. にしのこまんぷく食堂 21

3. PROJETO CONSTRUIR 34

Ⅳ. アンケート調査 43

1. アンケート調査の概要 44

2. 調査結果 45

3. 調査票 57

Ⅴ. ヒアリング調査 61

1. アーティストへのヒアリング 62

2. 食堂スタッフへのヒアリング 65

I. 検証・考察

(1)事業実績の分析

公益財団法人堺市文化振興財団が実施した、令和 5 年度の「子ども食堂における芸術家派遣事業」では、音楽、美術、演劇のアーティストが年間を通じて堺市内の 3 団体のこども食堂と継続的に関わり、ワークショップを共に実施した。本事業は令和 3 年度から開始しており、1 年目は「出会い・実験」、2 年目は「基礎固め」、3 年目の令和 5 年度は「2 年目を踏まえた発展」と位置付けている。令和 5 年度の延べ実施回数は 13 回、参加延べ人数は 332 人となっている（前年度は 3 団体、14 回、260 人）。こども食堂の「居場所としての機能」を高めることをめざして、それぞれの食堂で 1 年間の目標を設定し、食堂スタッフ・アーティスト・財団スタッフなどが信頼関係を築きながら、目標に沿った芸術ワークショップを協働で運営した。

(2)モニタリング調査

ワークショップの企画・制作・運営の経験が豊富な関西在住のコーディネーター 3 名に協力を依頼し、3 団体のこども食堂でのワークショップに 1 名ずつ記録者として派遣し、ワークショップの現場の状況をモニタリングした。モニタリングは各団体 3 回で、各回の詳細のレポートを作成した。記録者の主な所感は下記の通りである。

- 同じアーティストで 2 年目の音楽ワークショップを行ったいづはまスマイル食堂では、アーティストとこどもたちとの関係性の変化が顕著だった。アーティストは進行に集中しつつ、年上の子たちが年下の子たちをケアすることで、こどもたち自身が居心地の良い「みんなの場」をつくろうとしていた。アーティスト、こどもたち、こども食堂スタッフ、財団スタッフの間に信頼関係が育まれてきたことで、互いの安心感があり、そのことが継続的な参加にも繋がっていた。
- 異なるアーティストで 2 年目のにしのこまんぷく食堂では、昨年度は別の内容とアーティストでのワークショップを行った。オリジナルの美術作品に挑戦し、まちなかで展示し、お互いの作品を鑑賞し合う機会をつくることで、こども自身が頭の中で感情や考えを整理する大切な時間を持つことができた。また、食堂スタッフや財団としても、地域に対して綿密に情報を発信し、地域全体でこどもを見守るネットワークを築く足掛かりとなった。
- 今回初めて実施した PROJETO CONSTRUIR KODOMOSHOKUDOU（以下、PROJETO CONSTRUIR）では、ブラジルにルーツを持っているこどもとその保護者が俳優と一緒に演劇を使って遊んだ。アーティスト、財団スタッフ、こども食堂のこどもや実践者は、ワークショップの進行役と参加者という関係性を越えて友情に近いものとなり、言葉の壁を越えて「みんなで遊んでいる」という雰囲気が生まれた。食堂スタッフは「みんなはこの時間を絶対忘れないと思う」と語るほど、参加者 1 人ひとりに変化が見られた。

(3)アンケート調査

3 団体のワークショップに参加したこどもたちと保護者にアンケート調査を行った。調査票は、こども対象と保護者対象の 2 種類で共通の設問を設定し、参加者各自の「初回」の参加と「最終」の参加の際に配布・回収を行った。

回収数は 145 件で、実施会場別の回答の割合（参加したワークショップのジャンルの割合も同じ）は、いづはまスマイル食堂（音楽）が 54%、にしのこまんぷく食堂（ダンス）が 22%、PROJETO CONSTRUIR（演劇）が 24%。主要なアンケート調査の結果は下記の通りである。

- こどもの回答者で、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「こども食堂がきっかけで、話すようになったこどもは何人いますか？」という質問では「同じ学校の違う学年のこども」、「違う学校のこども」、「おとな」の 3 項目について「いない」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が減少している。
- こどもと保護者を合わせた全員に対して「こども食堂で出会った人について、つぎのような人はいますか？」という質問で、「困ったときは助けてくれる人がいる」については「そう思う」が 66.9%、「どちらかといえばそう思う」が 20.7%、「そう思わない」が 4.8%となっている。
- こどもと保護者を合わせた全員に対して「今日のようなイベントを、友だちにどの程度すすめたいと思いますか」という質問で、「0 まったくおすすめできない」から「10 とてもおすすめできる」までの 11 項目から 1 つを選択してもらったところ、「10 とてもおすすめできる」が 58.6%、「7」が 9.7%、「5」が 8.3%となっている。11 項目を数値として平均化すると 8.7 点となっている。また、複数回のワークショップ

に参加した同一人物の初回と最終の回答を比較すると、「初回」の平均は 9.0 点、「最終」は 9.5 点となっている。

(4)ヒアリング調査

ワークショップを行ったアーティスト 3 名と、こども食堂スタッフ 3 名、それぞれを対象にグループインタビューを行った。インタビューでは、「関連プログラムの実績」「プログラムへの期待」「こどもの居場所へアーティスト派遣することの価値」「実施に向けた課題」「広く展開するための留意点」「アーティスト派遣の可能性」の 6 項目を共通の質問項目とした。ヒアリングで聞かれた主要な意見は下記の通りである。

- アーティストからは、音楽、美術、演劇といったそれぞれの表現を通して、ワークショップの時間が、どのような参加のあり方も認められて、その人が自分自身でいることを尊重されて豊かな時間をつくることに価値を置いている点が共通していた。
- こども食堂でのワークショップを広く展開していくために、アーティストとしては「トライ・アンド・エラーを繰り返す要素が大きい」、「アーティストと参加者がお互いにフラットに関わり、表現をリスペクトし、認め合えるか」、「普段から人との関わりがうまくいっているところも楽しいが、意義としては、そういう関わりを提案できるような場所に行くのがよい」といった意見が聞かれた。
- こども食堂のスタッフからは、3 団体それぞれにワークショップに取り組んできた経緯や目的が異なっているものの、継続してきた 2 施設（いづはまスマイル食堂、にしのこまんぷく食堂）では、続けてきたことで表れた変化が、アーティストとこどもたちとの関係、こどもたち同士の関係、財団と食堂スタッフの関係など、多層的、かつポジティブに表れていることが分かった。
- 今年度の初回の取組となった PROJETO CONSTRUIR では、ブラジルにルーツを持つこどもたちや保護者が抱えている様々な課題に対して、言葉を越えたコミュニケーションから信頼関係が生まれ、自尊心が回復するといった効果が垣間見られている。
- こども食堂スタッフから、これまでの取組の経験から「事柄（背景）、人柄（実践者の思い）、地域柄（地域性）」の違いを踏まえて、企画段階から丁寧に対話をすることが、この事業を広げていくために必要だという意見があった。

(5)全体を通した考察

令和 5 年度の「子ども食堂における芸術家派遣事業」の結果（アウトプット）は、実施会場 3 団体、延べ実施回数 13 回、延べ参加人数 332 人で、延べ参加人数では前年度を大きく上回る実績を残すことができた。そのうち、2 会場ではこれまでからの継続的な実施により、リピーターの参加者も着実に増えている。

このリピーターの参加者がもたらす成果（アウトカム）も大きく、モニタリング調査やヒアリング調査では、年上の子たちが年下の子たちのケアをする関係が生まれ、こどもと食堂スタッフが今まで以上に開かれた関係を持つことに繋がっている。さらに、こども自身が「居心地の良い場所」を自らつくり出そうとする態度や、家庭や学校とは異なる「フラットな関係」が生まれるきっかけをもたらしている。

また、アンケート調査では、こども食堂での出会いで「困ったときは助けてくれる人がいる」という実感を持つ割合が 9 割近くで、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の前後比較では、初回よりも最終で、交流が増えていることなど、数値的にも成果が表れている。

こうした成果を受けて、事業の波及効果（インパクト）としては、こども食堂でのワークショップをきっかけとして、地域の様々な施設や団体とのつながりの足掛かりが生まれていることが挙げられる。にしのこまんぷく食堂が、こどもたちの作品を、まちなかの公園、病院、保育園、公共施設などに展示したことは、こども食堂を拠点として、地域のこどもたちに関心を寄せて見守る地域のネットワークを形成している。また、PROJETO CONSTRUIR では、アーティストとこどもたちがワークショップをきっかけとして、学校やこども会といった地域とのつながりを模索する意欲も聞かれている。

「子ども食堂における芸術家派遣事業」は、これまでの事業の成果を着実に蓄積しながら、堺市の文化芸術振興のみならず、こどもたちを軸とした地域における社会包摂の実践と、共生社会の実現に向けて着実に前進している。

なお本調査は、競輪の補助を受けて実施した。

II.事業実績

1. 事業概要

(1)全体概要

- 堺市内のこども食堂（3 団体）を対象に年間複数回の芸術ワークショップを企画・実施することで、こども食堂の「居場所としての機能」を高めることをめざして実施する事業。
- 事前にヒアリングした内容を基にそれぞれの食堂で 1 年間の目標を設定する。期間中は同じアーティストが継続的に関わり、食堂スタッフ・アーティスト・財団スタッフなどが信頼関係を築きながら、目標に沿った芸術ワークショップを協働で運営していく。
- 本事業は令和 3 年度から開始しており、1 年目は「出会い・実験」、2 年目は「基礎固め」、3 年目は「2 年目を踏まえた発展」と位置付けている。

(2)実施団体と年度当初の活動方針

いづはまスマイル食堂（西区浜寺船尾町）

- 古橋果林さん（音楽ワークショップ・リーダー）と堺市新進アーティストバンクの登録アーティストの協同による即興を交えた音楽ワークショップ。
- 食堂実施日と併せて開催したり、屋外の駐車場で実施したりするなど工夫する。こどもをはじめ、人々の間に「通じ合える」文化をつくる。
- 音楽ワークショップは外から見る、手伝うなど、関わり方は様々で、こどもだけではない、いろんな人々にとっての居場所にしたい。様々な人が自分なりの形で関わり合う場を創出したい。

にしのこまんぷく食堂（堺区協和町）

- 柴田英昭さん（淀川テクニック）（美術家）による収集ごみを用いた造形ワークショップ。
- こどもが大人と一緒に制作する中でコミュニケーションを図る。作品を地域に展示する芸術祭も開催する。最終回には鑑賞会も実施する。
- 食堂スタッフを始めとして地域の大人がこどものことをより知ることができる場にして、食堂がこどもにとって身近な存在になりたい。併せてこどもが地域に親しむ機会もつくりたい。

PROJETO CONSTRUIR KODOMOSHOKUDOU（堺区石津町）

- 大熊ねこさん（俳優）によるブラジルルーツのこどもたちとの演劇ワークショップ。
- 劇あそびによってこどもたちの中に表現のバリエーションを増やす。
- 自分で表現できた、相手に伝わったという体験を積み重ねる。自分自身の表現を出しつつ、また他者の表現も認め合う場をつくり、こども同士の信頼関係も積み重ねる。
- 外国ルーツのこどもたちは、学校では言葉の壁もあり「できない子」として扱われることが多く、こどもたちが自分のやりたいことができない、またはこども自身が自分のできることに気づいていない。そのため、こどもたちが自分のできることに気づき、やりたいことをできる場をつくりたい。

2. 事業実績

	いづはまスマイル食堂	にしのこまんぷく食堂	PROJETO CONSTRUIR
アーティスト	古橋果林（音楽ワークショップ・リーダー）	柴田英昭（淀川テクニック）（美術家）	大熊ねこ（俳優）
共演またはアシスタント	岩本美貴（ユーフォニアム）、竹村七音（ピアノ）、伴菜生（フルート）、3名ともに堺市新進アーティストバンク登録音楽家		はせなかりえ（俳優）、池川貴清（俳優）
実施日（参加者数）	2023 年 8 月 6 日 (34 人) 10 月 22 日 (25 人) 11 月 12 日 (26 人) 12 月 17 日 (29 人) 2024 年 1 月 6 日 (38 人)	2023 年 8 月 22 日 (13 人) 10 月 18 日 (14 人) 11 月 15 日 (14 人) 12 月 20 日 (76 人)	2023 年 9 月 16 日 (16 人) 10 月 14 日 (14 人) 11 月 4 日 (16 人) 12 月 9 日 (17 人)
実施回数	5 回	4 回	4 回
参加延べ人数	152 人	117 人	63 人

子ども食堂における芸術家派遣事業の合計

実施会場…… 3 団体

延べ実施回数……13 回

参加延べ人数……332 人

III. モニタリング調査

※ワークショップの各回の参加者の数はⅡ. 事業実績（P.7）での参加者数を公式な記録としているが、Ⅲ.モニタリング調査では、ワークショップでの参加者の属性や様子を報告するため、記録者が確認した参加人数をそのまま掲載している。なお、開催当日の活動状況や参加人数の規模によって、記録者の目視でのカウントや事前申込の人数など確認の方法が異なるため、事業実績での参加者数と異なる箇所がある。

1. いづはまスマイル食堂

記録者	内山幸子	会場	天理教泉濱分教会 2 階講堂
進行役・進行アシスタント			
進行：古橋果林さん、アシスタント：伴菜生さん、竹村七音さん、岩本未貴さん			
記録に関する補足説明			
1 回目	2023 年 10 月 22 日（日） 古橋さんは昨年度から継続して進行役を務める。伴さん、竹村さん、岩本さんは今年度いづはまスマイル食堂を初めて訪問する。参加者は昨年度からの継続参加者が多いが、新しい参加者も毎回いる。継続参加者がお友だちを誘ってきてくれる。対象は主に小学生だが、「未就学児の参加はご相談ください」としているので数は少ないがいる。		
2 回目	2023 年 11 月 12 日（日） 竹村さんがインフルエンザでお休みとなり、財団・石澤さんがピアノ代役を務めた。		
3 回目	2023 年 12 月 17 日（日） 未就学児の親子を対象にしたワークショップで、これまで参加していた小中学生は「お手伝いスタッフ」として募集した。こども食堂のグループ LINE で食堂スタッフの古藤さんが「小さい子たちが安心して楽しめるようにお手伝いを募集します」「みんなで楽しみましょう」というふうに呼びかけた。		

いづはまスマイル食堂　記録１回目：2023 年 10 月 22 日（日）

時間	13:00 開始～14:30 終了（計 90 分）		
参加者	こども	24 人	男女比は申込時に確認していない。年齢層は未就園児から中学１年生と保護者。
	食堂スタッフ	１名	古藤喜代恵さん
	財団スタッフ	３名	土田さん、増田さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	１名	財団理事長

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
12:00	アーティストたち	こどもたち	好きな名前を聞いて名札をつくって渡す。一緒に食堂のごはんを食べながら交流する。いつも通りこどもたちの情緒や健康の様子などを確認している。
13:00	古藤さん	A さん	旗を渡し、みんなの列の先頭で入場の指揮をとるようお願いした。
	A さん	こどもたち	みんなの先頭で旗を持ち、列をつくって入場。
	古橋さん	こどもたち	ウォーミングアップ。古橋さんの動きを真似する、手を鳴らして送って次の人に回す、カホンのリズムに合わせて自分の名前を紹介。その声に続けてみんなでその名前を呼ぶ。
13:15	全員		音楽に合わせて会場を歩きまわるワーク。出会った人と挨拶をして交流する。端っこに居がちな人も大きく空間を動きまわる。
13:30	全員		鳥の巣ゲーム。二人が手を合わせて巣をつくり、鳥役のひとりが巣に入る。巣のペアと、巣と鳥の組み合わせをシャッフルする。隣にいる人とはペアにならない、などルールを設けることで、仲良しグループがシャッフルされる。
13:40	各自		休憩時間。楽器を触って遊んでいる子たちが多い。
13:50	各自		グロッケン、シェーカー、タンバリン、オーシャンドラム、レインスティック、ウッドブロック、ハーモニーパイプ、ギロなど、気になる楽器で自由に遊ぶ。
	古橋さん	B さんと C さん	昨年度からの継続参加者の B さんと C さんが遅れてきて廊下から見ていた。古橋さんが楽器を渡したことで、輪に入るきっかけになった。
14:00	各自	全員	1 人 1 つずつ好きな楽器で音を紹介する。みんな耳を傾けている。
14:05	各チーム		3 チームに分かれてチームごとに曲をつくる。
14:20	各チーム	全員	チームでできた曲をみんなの前で紹介する。

14:25	各チーム		できた曲を絵や記号で楽譜にして表現していく。模造紙にみんなで書く。
14:40	古橋さん	全員	各チームがつくった楽譜を古橋さんが紹介する。タイムオーバーだったので、他のチームの楽譜を演奏するワークは割愛した。
14:45	アーティストたち	こどもたち	ワークショップが終了し、100 円分の駄菓子を自由に選んでお土産としてもらえる「駄菓子屋さん」のスペースに移動して交流する。
15:30	アーティストたち	食堂及び財団スタッフ	「駄菓子屋さん」での交流が終了し、ワークショップを振り返る。
	B さん	アーティストたち	振り返り後に搬出する際、B さんがまるで舞台スタッフのように運ぶのを手伝ってくれた。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- グループワークになるともどかしくなる。連続ワークショップなので、もどかしさを 1 回で解決しなくてよい。遠慮しあってうまくいかない時間も良い時間に見える。居心地よく、よい塩梅にできたらいい。
- もどかしさの要因は年齢ではなくて個々の特性。もどかしさのポイントがそれぞれ異なる。褒めて伸ばしていくしかない。
- 別のチームが作曲した演奏を見て「ルール違反だ」とつぶやく子がいた。ルールを守ったチームと逸脱したチームがあったが、ルールを守ることに固執する必要はなかったので、途中で声かけをできればよかった。
- アシスタントとして初参加だった。もう少し迷っている子が音を引き出す手伝いができたらよかった。
- 何かを躊躇する子に対して、演奏家だから伝えられることがあると思えた。

こども食堂スタッフ

- B さんは家庭がしんどい環境にある。学校の部活も居場所じゃない。タイミングを見計らって誘ったら途中から来た。舞台スタッフとして動く場があってよかった。
- 中学生の A さんに年下の D さんを引き合わせたら「自分に何でも聞きや」と言って面倒を見てくれた。D さんはひとりでも楽しめるけれども、中学生 A さんに声をかけられて楽しそうだった。

財団スタッフ

- 誘導しすぎるのは良くないが、どうしたいかを聞いて TIPS を提示するのはよい。ちょっと乗ってきたら手を放す。「今日は何が始まるの？」と楽しみにしてもらえるとよい。

◉記録者による全体の所感

今回の調査の方針は「こどもを軸とした対人関係の変化を追う」ことだったが、いづはまスマイル食堂の場合は昨年度のワークショップからの継続の参加者が多く、ワークショップのプロセスにおける変化よりも、アーティストとこどもたちとの関係性の変化に驚いた。

ワークショップが始まったときから、古橋さんが進行に集中できていて、昨年度とは全く様子が異なる。ワークショップに乗った方が楽しいことをわかっていて、古橋さんに安心して委ねている様子だった。昨年は人見知りしがちだった子が、今年はニコニコしながらアーティストに近寄ってくるとのことだ。とはいえ、昨年からの継続の参加者が連れてくる新しい参加者や未就学児の親子もいるといったことから、それなりの緊張感もあり、仲良し同士でペアを組みがちな状況があった。鳥の巣ゲームで座る場所や隣り合う人が一度シャッフルされたことで、場が一気にほぐれた感じがあった。

ワークショップ中に小学生の高学年から中学生の子たちが年下の子たちのケアをする場面がよく見られるようになった。こどもたち自身が居心地の良い場をつくろうとしていて、みんなの場になってきていると感じられた。

いづはまスマイル食堂　記録２回目：2023 年 11 月 12 日（日）

時間	13:00 開始～14:30 終了（計 90 分）		
参加者	こども	26 人	男女比は申込時に確認していない。年齢層は未就園児から中学１年生と保護者。
	食堂スタッフ	2 名	古藤一彦さん、古藤喜代恵さん
	財団スタッフ	4 名	石澤さん、川﨑さん、田中さん、橘さん
	その他の参加・視察者	0 人	

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
12:00	アーティストたち	こどもたち	好きな名前を聞いて名札をつくって渡す。一緒に食堂のごはんを食べながら交流する。いつも通り、こどもたちの情緒や健康の様子などを確認している。
開始前	古藤さん	A さん	最年長で昨年度から継続参加している中学生のＡさんにみんなの先頭で看板を持つ役を任せる。
	古橋さん、石澤さん	B さん	古橋さんと石澤さんが、B さんと親との会話のやり取りを受けて、B さんに対しては「ちゃん」や「くん」を付けずに「B」と呼ぶのがよいと判断した。
13:00	A さん	他の参加者	先頭に立って入場。アーティストたちの演奏曲はアーバン《ファンタジア・アンド・ヴァリエーションズ》。
	全員		ウォームアップ①みんなで輪になって、古橋さんのまねっこワークをする。
	全員		②リズムに合わせて自分の名前を呼ぶ。続けて、みんなでその子の名前を呼ぶ。
	全員		③自分や隣の人の体の一部を指さす。
	全員		④①～③をまぜながら、古橋さんの合図に合わせて居場所をシャッフルする。「今まで隣にいた人の隣にいかない」というルールを設ける。
13:25	各自		いろんな楽器を触って、お気に入りを探す。複数の楽器を試す子も、1 つの楽器をずっと鳴らす子もいる。
	各自	全員	お気に入りの楽器の音をひとり 1 つ選び、紹介する。ワンフレーズを作曲する。
	古橋さん	全員	古橋さんのリードに合わせて音を出していく。
	こどもたち	全員	3～4 人の希望者がリード役をやってみる。C さんの動きから「ここからここまでの人が音を出す」というサインをつくる。親子でのリード役もあり。

	古橋さん	こどもたち	サウンドペインティングの説明をする。古橋さんのサインに合わせて音を出していく。ボリュームの大小、長短など。
14:05	こどもたち	全員	3～4 人の希望者がサイン役をやってみる。先のリード役とこのサイン役がだいたい同じ。
	各チーム		楽器ごと（マラカス、ギロ、タンバリン、あと 1 つ）のチームに分かれてリズムを練習する。未就学児は大人と 2 人 1 組でスカーフを広げて持ち「上・下・上」などヒラヒラさせる役になる。
	A さん	D さん	中学生の A さんは小学 2 年生の D さんと同じタンバリンチームだったため、「一緒に入る？」と声をかけ、難しいとわかると頭を撫でて慈しんでいた。
14:20	古橋さん、岩本さん、石澤さん	こどもたち	古橋さんのサイン、進行補佐役の岩本さんのユーフォニアム、石澤さんのピアノ演奏に合わせて、4 チームでセッションをする。タンバリン部隊の兄弟が踊りながら叩きだした。隣のチームに音を送る、止める、など上手にできていた。演奏曲はユーマンス《キャリオカ》。
	伴さん	こどもたち	この日は楽器を演奏せずに、こどもたちとのワークに自由に関わっていった。
14:25	古橋さん	全員	終わりの挨拶をする。5 分早めに終了した。
14:30	アーティストたち	こどもたち	「駄菓子屋さん」に移動して交流する。
	アーティストたち		「駄菓子屋さん」での交流を終了し、ワークショップを振り返る。

◉保護者・こどものコメント（終了後の聞き取り）

- 3 歳のこどもと参加した保護者の E さん。「途中で退室したけれども、本人としては満喫したという感じ。周りを見ながら音を止められるようになった。母としてこどもの成長を感じます。昨年はベルを鳴らし続けるだけだった」。
- 小学 6 年生の F さん。（記録者：どうして参加しているの？）「同級生の G さんに誘われたから」。（記録者：ルールを決めて演奏するのはどうだった？）「学校でやるのと同じ。楽譜を見て演奏する感じ」。卒業コンサートで演奏する曲の話や過去の演奏経験などを教えてもらった。誘った同級生の G さんが先に帰っても、F さんは最後まで参加していた。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- 指示された音楽をやるだけでなく自発的な音を奏でていけるようになるためのワークを目指した。小さい子は特に自分の世界にいるけれども、だんだんみんなの音を聴きながらできるようになればよい。
- 昨年度から参加している子たちの成長が感じられる。良い演奏をする。ワークを助けてくれる。
- ファシリテーターは「待つ」ことが大事だ。もっと待てばよかった？と思うところがあった。
- 方針が変わったことでワークの順番は変えたけれども、メニューの要素は変えていない。
- こどもたちが自発的に演奏できていると感じた。

- 最後のセッションで「今日やってきたワークはこういうことだったのか」と自分で気づくことができたのではないか。

こども食堂スタッフ

- 保護者の方にとっては、食堂に来ることが、子育ての悩みを相談したり、いろんな人との関わりを見つけたり、社会参加の機会になっている。積極的に食堂の手伝いもしてくれる。このワークショップが食堂に来るきっかけになっている。

財団スタッフ

- 息が合ったときの快感を感じ取れている子はいるのではないか。
- 途中退室した子も、とても名残惜しそうに帰らないなど、行動と感じていることが必ずしも合致しない。
- 次第に心が躍っていくのが見える気がした。来た時と帰る時で心情が違うのだろうと想像できる。

◉記録者による全体の所感

前回に続き、ウォームアップから演奏体験まで、みんなで楽しめていると感じた。輪の外から見ていると、みんなが徐々に自分たちの音世界に入っていて、最後に演奏の快感を実感しているのが感じ取れた。昨年度の最終回で、集中して演奏しているときとはまた異なる、リラックスしている感じがあった。ひとつのコミュニティが生まれているようにも見えた。

振り返りの内容から、参加者がこのワークショップで体験している音楽に対して能動的（自発的に演奏したり音を楽しめたりしている）になっていると感じる。周りへの気配りができるようになっているということが複数の方から語られたが、「自分と他者の関わり」に「優しさ」を芽生えさせるのも音楽がつくる場の力だと思った。

いづはまスマイル食堂　記録３回目：2023 年 12 月 17 日（日）

時間	13:00 開始～14:00 終了（計 60 分）		
参加者	こども	32 人	親子参加者（①）は 10 組 24 人、こどもスタッフ（②）は 8 人。年齢層は①が 1 歳から 5 歳、②が小学 2 年生から中学 1 年生。
	食堂スタッフ	1 名	古藤喜代恵さん
	財団スタッフ	2 名	石澤さん、川﨑さん
	その他の参加・視察者	0 人	

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
12:00	アーティストたち	こどもたち	好きな名前を聞いて名札をつくって渡す。一緒に食堂のごはんを食べながら交流する。いつも通り、こどもたちの情緒や健康の様子などを確認している。
	こどもスタッフ（小中学生の参加者）		配膳のお手伝いをする子もしない子もいる。
12:50	古橋さん	こどもスタッフ	手伝ってほしいことについて説明する。
13:00	こどもスタッフ	親子参加者	先頭に立って入場を先導する。アーティストたちの演奏はメンデルスゾーン《春の歌》。
	古橋さん	親子参加者	古橋さん挨拶。メンバーが自己紹介して音を出す。 小さい子たちがざわざわして古橋さんの声を聴いてもらいにくい。楽器の音が出ると聴き耳を立てたがその沈黙を破る子もいる。
	こどもスタッフたち	こどもスタッフ A さん	中学生や高学年の子たちが落ち着かない小 2 の A さんが暴れているのを諭す場面が多い。
13:03	石澤さん	こども参加者 B・C さん	部屋を飛び出した B さんと C さんを追いかける。C さんが泣きだしたので抱っこしてあやす。お母さんが抱っこして外に出る。
	記録者	こども参加者 D さん（C さんの兄・4 歳）	お母さんに「泣き止むまで外にいてもいいですよ」と伝えると「まだ D さんが中にいる」と心配。C さんとお母さんが外に出ている間、一緒にワークをする。
13:05	古橋さん	全員	ウォームアップ。古橋さんを真似しながら手をぶらぶら、手をつないで会場を歩きまわりながら出会った人に挨拶、合図に合わせて左右に横歩きする。バンクアーティストの演奏はゴセック《ガヴォット》。
13:15	古橋さん	こどもスタッフ	「参加者にスカーフを配るお手伝いをしてください」と声をかける。

	こどもスタッフＳさん	こども参加者 Ｅさん	配ったスカーフをＥさんにマントのように結んであげている。そばにいるクラスメイトも見守っている。
	古橋さん	全員	座ってスカーフのダンス。穏やかな演奏に合わせて合図でスカーフを上に下にひらひらさせる。バンクアーティストの演奏はフォーレ《シチリエンヌ》。
13:30	古橋さん	こどもスタッフ	「参加者のスカーフを回収するお手伝いをしてください」と声をかける。
	古橋さん	全員	エッグシェーカーを編みカゴから取り出して見せる。みんなに取りに来てもらう。
	古橋さん	全員	立って、スカーフダンスでの「上・下」に加えて、指で「１」を示したら１回、「3」を示したら３回シェーカーを鳴らす。演奏は《プリンク・プルンク・プランク》。
13:35	古橋さん	こどもスタッフ	舞台転換。楽器をのせた布を中央にひっぱり出す。こどもスタッフは待っていたように飛び出していく。出遅れた子たちは固まってモジモジしている。参加者に背中を向ける姿が増えてくる。
	全員		楽器で自由に遊ぶ時間。同学年のこどもスタッフ３人が固まって別のおしゃべりをしている。他のこどもスタッフもバラバラに遊んでいる。
	こどもスタッフＥさん		（いつもワークショップは参加せずに見学している子）「おなかが痛い」といって一時退室したが、戻ってきて後ろからみんなを見守っている。完全退室はしない。
	記録者	こどもスタッフＦさん他１名	2 人が話し込んでいる姿が気になったので「今日の果林さん大変そうだから手伝ってあげて」と声かけすると頷くが、戸惑っている。
13:40	古橋さん	全員	音の運動会の説明。4 つのチームに分かれてサーキットのように楽器を並べていく。
13:45	古橋さん	全員	古橋さんが音の運動会の実演を見せる。サーキット上の楽器を１つずつバチでたたいて音を鳴らしていく。
	参加者のこども		希望する子がひとりずつサーキットを回る。一番はＤさん。その後 3〜4 人。お母さんがピアノ伴奏してコラボレーションする場面も見られる。
	古橋さん	参加者Ｇさん	バチを使わずにやってみよう、とルール変更。音を鳴らすために道具を使うか使わないかを考えたり、叩く道具を取りに行ったり来たりしながらゴールした。
14:00	古橋さん	こどもたち	終わりの挨拶をする。「駄菓子屋さん」に移動して交流する。
14:45	アーティストたち		「駄菓子屋さん」での交流を終了し、ワークショップを振り返る。

◉保護者のコメント（終了後の聞き取り）

- ワークショップ終了後、はじめていづはまスマイル食堂に来たお母さんお二人に聞き取りをした。どちらも保育園の保護者つながりで常連のお母さんに誘われて参加した。このような親子イベントに出かけることは少なく、お子さんはいずれも 4 歳で年少組とのことだった。
- 1 人目：「こどもが場になじむか心配だったが、“動くな”みたいな制限のないワークだったのでこどもも伸び伸び参加できて良かった。気に入らないとモノをたたいたりして怒るが、今回はなかった。人好きな子なので優しいスタッフを見極めて安心して遊んでいた」。普段からお子さんの発達を心配しているためか、ワークを見ている表情が険しかった。古藤さんによると、集団行動が苦手なお子さんで参加を心配していたとのこと。
- 2 人目：「楽しんで参加できた。こどもは体操教室で最近まねっこができるようになってきた。今日も最初にサーキットをまわる見本を見せてくれたので真似してできた」。

◉事後の振り返りの記録

全員

- 聴いてほしい音や話を聴いてもらうことが難しかった。お母さんたちが楽しんでいる様子が見られてよかった。

アーティスト

- 純粋に音や音楽を楽しんでもらえていると感じた。
- アーティストたちがメインで演奏し、こどもたちやお母さんは体を動かすことに専念したので参加しやすかったのではないか。体を動かすうちにアンサンブルが合ってきたのも良かった。
- アンサンブルによって音の共感性に何となく気づいてもらえたと思う。
- 概ね良い雰囲気だった。こどもスタッフも交えて不思議な配置になったけれども、それも含めて「ここ（いづはまスマイル食堂）っぽい」と感じた。大人数が苦手な人が入り口側に集まりがちなことも問題ではない。
- 「音の運動会」はバチでたたいていくときはタスクをこなしていく楽しさがある。バチをなしにすると、どうやって音を出すか考えはじめている様子が興味深かった。
- （こどもたちにスタッフとして参加してもらう初の試みについて）開始前のミーティングでは『わかってる、任せろ！』といった意気込みがあったがこどもたちが、いざ始まると役割を見失いがちで、モジモジしていた。
- 大人が多く緊張したかもしれない。お願いしていた見守り役も、大人が先にケアするので遠慮してしまった、など理由はいろいろ考えられる。迷いながら役割を見つけてもらえると良い。

財団スタッフ

- 常連の小さい子も、自分より小さい子が多かったせいもあって、いつもより落ち着いてワークショップに滞まる時間が長かった。
- こどもたちが部屋に入ってきたときからアーティストの楽器に興味津々だった。楽器を触りにいくのでヒヤヒヤしたが、楽器に関心を持ってもらえたことはよかった。

◉記録者による全体の所感

ワークショップ開始直後は参加者もこどもスタッフもそわそわして、場の集中力が分散していた。昨年度のワークショップの前半を想起させ、進行役やアーティストたちが苦労しそうな展開が予想された。しかし、振り返りでは「大変だからやめるかどうか」の議論は一切なく、「うまくオーガナイズしてこどもスタッフたちも輝かせてあげたい！」といった目標に向かって議論が進んだ。振り返りのコメントを総合していくと、大人たちもこどもたちもお互いへの配慮（ケア）と思いやりが錯綜していたことが感じられた。その結果、会場は“てんやわんや”が繰り広げられたが、その根っこがケアの精神なので、殺伐とすることなく非常に温かな空気が流れていた。社会全体がこのように他者を思いやることだけに集中したらどんなに平和な世界になるだろうと想像したほどだ。

例えば、スタッフはこどもたちに手伝いを命令したり、強要したりしたくなかった。一方、こどもたちは古橋さんからのお手伝いの指示を待ちわびていて、舞台転換やスカーフ回収などわかりやすい仕事に飛びついていたように見えた。お手伝いの依頼を命令や強要しない方法として、こどもたちが「それはやりたくない」と言えること、「やってもいいよ」と許可する立場になる（アーティストやスタッフが許可される立場になる）コミュニケーションにすることで回避できるかもしれない。

今年度は、いづはまスマイル食堂の全 5 回のワークショップのうち、10/22、11/12、12/17（記録の 1、2、3 回目）のワークショップを視察した。アーティストやスタッフ、こども食堂スタッフで行う振り返りで出てくる各回ごとの反省や提案について、次の回で応答し異なる方法を試していく展開の速さと柔軟さがある。それを可能にするのは第一に古橋さんの経験知によるワークショップの引出しの多さと、課題を捉えてすばやく次の展開につなげる判断力である。スタッフも柔軟に対応していく。さらに、いづはまスマイル食堂のワークショップでは大多数の子が継続的に参加しているため、回を重ねながら音楽体験を深めていくことができる強みがある。

また、アーティストたちがワークショップ前の食事の時間や、ワークショップ後に行われるレクリエーションの時間に参加することで、ワークショップの時間以外でも、こどもたちの関わりを丁寧につくってきたことがある（12/22 にも「宿題しよう会」にも訪問して楽器に触れられる時間を提供した）。このようにアーティスト、参加者のこどもたち、こども食堂スタッフ、財団スタッフの間に信頼関係が育まれてきたことで、「今回うまくいかなかったことも次回に向けて楽しめる」という互いの安心感がある。そのことがまた継続的な参加に繋がっている。

11/12 のワークショップから、当初の目標「即興バンドをつくる」が「多世代が交流し共に音楽を楽しめる場づくり」に変更になったが、今回のワークショップを見ていると、アーティストとこどもスタッフたちが協力して、他の人に音楽の楽しさを届けていく「チーム」になる可能性は大いに感じられた。いづはまスマイル食堂ならではのスタイルで、さらなる変化をし続けるワーク・イン・プログレスな展開への期待が高まる。

2. にしのこまんぷく食堂

記録者	川那辺香乃	会場	堺市人権協会事務所 / 堺市人権ふれあいセンター
進行役・進行アシスタント			
柴田英昭さん（淀川テクニック）			
記録に関する補足説明			
1 回目	2023 年 10 月 18 日（水） 時間の区切りはあるものの、出入り自由でいつ来てもいつ帰ってもよい状態で実施した。机と椅子を並べ、グルーガンをひとりずつ使えるように設置されている。ところどころに柴田さんの作品が置いてある。会場の中と外に、大きなパーツ置き場がある（作品の材料）。パーツは柴田さんが海で拾ってきたものもあれば、食堂の周辺で回収したものもある。 出来上がった作品は、柴田さんが外で撮影を行った。		
2 回目	2023 年 11 月 15 日（水） 前回とほぼ同じ配置で、テーブルが前後 2 つに分かれている。この日はワークショップ前に、展示されているいくつかの作品をスタッフと見に行った。会場付近の駄菓子屋の前に置いてある作品を見に行った際に、店主からこのまちの状況について話を伺う。 「にしのこ芸術祭」として、こどもたちが制作した作品を人権ふれあいセンターや保育園、学校、公園など様々な場所に設置したが、公園など野外に設置したものの一部は破損されるという事態が起きた。		
3 回目	2023 年 12 月 20 日（水） この日の会場は人権ふれあいセンターで、作品の鑑賞会を「にしのこ美術館」と称して開催し、これまでのワークショップで参加者たちが制作した作品を展示した。 15 時開始の予定だったが参加者が集まらず 16 時に始まった。保育園のこどもたちや、「にしのこ芸術祭」で協力いただいた関係者（堺市ダイバーシティ企画課、人権ふれあいセンターなど）も見学に来られ、出入りが多かったため、じっくり作品を鑑賞する場をつくることが難しい状況ではあった。		

にしのこまんぷく食堂　記録１回目：2023 年 10 月 18 日（水）

時間	15:00 開始～17:30 終了（計 150 分）		
参加者	こども	11 人	男女の内訳は、男子 2 人、女子 9 人。年齢層は小学校低学年が中心で、高校生 1 人、18 歳 1 人。
	食堂スタッフ	3 名	谷岡さん、加藤さん、井上さん
	財団スタッフ	4 名	石澤さん、土田さん、小川さん、川﨑さん
	その他の参加・視察者	12 人	学校教員 9 人、社協職員 1 人・他団体人名（新たにこども食堂を立ち上げ予定の方）

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
15:00	柴田さん	こどもたち	自己紹介をする。どんな作品をつくってきたか、スライドを使って説明していく。
	こどもたち		作品づくりを開始する。パーツを探し始める。
	A さん	柴田さん	《鳥》の作品を指差し「これ、どうやってつくったん？」と柴田さんに聞く。「中に発泡スチロールを入れて、その周りにいろいろくっつけたんやで」と答える。
	B さん	記録者	記録者の名札を見て話しかけてくる。そのまま一緒に外のパーツ置き場へ。
	B さん	記録者	パーツ置き場で記録者が貝殻のかけらを見つける。B さんも貝殻を探すが、なかなか見つからない。代用になるようなものを記録者がいくつか渡してみる。最初はあまりピンとこない様子だったが、次第に残すようになる。ある程度パーツが集まったところで自分の机に戻り制作し始める。
	加藤さん	C さん	はさみの使い方を教える。
16:00	谷岡さん	こどもたち	作品を展示することを伝える。1 作品は展示するものとして制作、他は自宅に持って帰ってもよいことを伝える。
	先生	こどもたち	小学校の先生たちが一気にやってくる。こどもたちに「がんばってるやん」「すごいやん」と声をかける。柴田さんの作品を見て先生が「すごいなぁ」と言うと、こどもたちが「すごいやろ」と答えている。
	財団スタッフ	こどもたち	完成したこどもから財団スタッフやこども食堂のスタッフが聞き取りながらキャプションを書く。 タイトルや感想などがなかなか答えられないこどももいれば、具体的なイメージを持って答えるこどももいる。中には早く次の作品をつくりたくて答えるのが面倒くさそうなこどももいた。「無題！」と答えるこどももいた。

	柴田さん	D さん	答えるのに躊躇しているこどもに対して「どの角度から見てほしい？」と聞く。
	加藤さん	A さん	「(この作品は)何しているところ？」「どこに住んでるん？」と聞いていくと、すらすらと答えていく。
16:45	E さん・F さん		途中参加。2 人で 1 作品をつくろうとすごい勢いでつくり始める。ひとりが「これは？」とパーツを見せると「いいやん」とどんどんパーツを集め制作していく。
17:00 すぎ	柴田さん		ワークショップが終了し、撮影がまだの人は撮影をする。まだ作品をつくっているこどももいる。
	C さん		すごく大きなパーツ（家庭用の照明器具）を持って帰ろうとするが自転車に入らず断念する。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- 前回から参加者がだいぶ変わった。先生が途中で来られたが、こどもたちが慣れ親しんでいる人たちなのでよりリラックスしてつくれていたのではないか。
- 細かい作品をつくっていることが印象深かった。言語化はしないけれども、本人たちは何かにこだわっている。その様子を見るのが好きだ。「こだわってつくるんだよ」と言うのを忘れたがこだわっていた。
- できるだけスタッフが手伝わず、本人にやってほしい。ただ、加藤さんがはさみの使い方を教えていたように、学び合いがいろんなところであるのはよいと思う。

こども食堂スタッフ

- 流れや雰囲気、このスペースがちょうどよかった。口コミで広がって、今回よりも参加者が増えた場合、場所を考えないといけない。
- お弁当の配布と重ならず、ちょうどよい時間に終われた。17 時を過ぎてもやっている子もいて終わるか心配していたが、ボランティアの数も多く対応できたのでよかった。
- 小学校の先生が来たときに空気が変わり、スイッチが入った子もいた。今後は、できたら来てくれたこども全員が作品制作を体験してほしい。
- 夏に 1 回ワークショップを実施したことで、キャプションの聞き方を工夫できた。前より話してくれるこどもが増えた。

財団スタッフ

- 小学校の先生に柴田さんの作品を自慢していて、最初のスライド説明ではリアクションが低かったが響いていたのかと思った。
- 今日は高学年のこどもたちの参加が少なかったが、クラブ活動と重なってしまったのかもしれない。お弁当を取りに来た際、「やりたかった」と言っている高学年のこどもがいた。
- 「どうやってつくっているの？」とこども同士がお互いに聞いてコミュニケーションが生まれていた。こどもたちの制作をどこまで手伝ったらよいかが難しかった。

◉記録者による全体の所感

作品づくりというシンプルなワークは、途中参加のこどもたちも入りやすく、にしのこまんぷく食堂のこどもたちに合っていると感じた。

また、夢中になって作品をつくる時間（ゴミの中から作品に合ったものを探す→見つける→創作する）が、大人のスタッフたちのポジティブな声かけと同等に、こども自身が頭の中で感情や考えを整理する上でとても大切な時間だと再認識した。キャプションづくりの際、感想を言葉にするのに時間がかかったこどももいた

が、このワークショップでは言語化することを進めすぎず、自分自身との対話となる静かな制作時間に力点を置いてもよいかもしれない。

開始から50分ほど過ぎたあたりで、全員が集中し、黙々と創作している時間が生まれた。こうした創作の場が、常に食堂の近くにあるとよいのだろう。

にしのこまんぷく食堂　記録２回目：2023 年 11 月 15 日（水）

時間	15:00 開始～17:30 終了（計 150 分）		
参加者	こども	11 人	男女の内訳は、男子６人、女子５人。3 年生が多く 5 年生が 1 人。リピーターは２人。
	食堂スタッフ	3 名	谷岡さん、井上さん
	財団スタッフ	3 名	石澤さん、土田さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	0 人	

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
15:00	こどもたち 記録者		すでに 3 人が開始前から待ち構えている。始める前に、いくつか気になるパーツを探してもらう。3 人だけだったため、記録者も参加する。
	A さん・B さん		途中から参加。A さんが記録者の隣に座る。A さんと B さんは兄弟で、A さんが兄。
15:10	柴田さん	こどもたち	前回同様、柴田さんが作品や海でゴミを拾っている様子など写真で紹介する。こどもはすでにどんなものをつくろうか悩んでいる様子で、こども同士で話している。しかし、黒いチヌやインドネシアでの作品が動いている様子を見ると反応があった。台湾の《飛び魚》の作品に「飛びそう！」と感想を言うこどももいた。
15:20	谷岡さん	こども	柴田さんの話が終わったあと、谷岡さんがこどもたちに「柴田さんは何をしている人？」という質問を投げる。こどもたちが「ゴミを拾う人」「新しいおもちゃをつくっている人」と答える。
	A さん	記録者	A さん「今日は何で来たん？」記録者「一応スタッフだよ」A さん「スタッフか」記録者「あなたは（なぜ来たの）？」A さん「グルーガンを使ってみたくて来た」。
	こどもたち		作品づくり開始。パーツを探し始める。記録者は A と外にあるパーツ置き場に向かう。こども 4 人が遅れてやってくる。こどもたち「つくりにきた！！」と会場に入ってくる。
	こども A さん	記録者	パーツを探す。A さんは何をつくろうか悩んでいる様子。「銃をつくってみたい、どんな形がいいか Google で調べてみようかな」と言っている。A さんは外にいる井上さんとも話していたため、パーツ探しに時間がかかっている。記録者は先にパーツを持って部屋に戻る。
	こどもたち	記録者	記録者に向かって、真正面にいるこどもが「先生、何つくってんの？」と声をかける。「カメレオンかなぁ」と言うと、「え？どのへんが？」と他のこどもも聞いてくる。記録者はつくっているものの角度を変えて「このあたりとか、カメレ

			オンっぽくないかな？」と言うと「ほんまや！」「いいやん」という反応が返ってくる。
	記録者	C さん	右隣にいるこども C さんのグルーガンがなくなったので、追加する。C さんはこちらが「何つくってるの？」と聞いても答えない。グルーガンがなくなった時だけ声をかけてくる。寡黙ではあるがグルーガンがちゃんとつくようにじっとくっつくのを待っていて、創作に集中している。
	こども	柴田さん	真正面のこどもが、柴田さんに「先生、できた！！」と声をかける。柴田さんが「おお～、名前は？」「どこに住んでるの？」と質問するとどんどん答えが出てくる。
	記録者	こどもたち	左隣のこどもの机にある赤い棒をもらっていいか尋ね承諾を得る。「先生は何つくってんの？」と質問され、作品を見せると「かわいい！！」「めっちゃいいやん！」と返ってきて「私のも見て！」と一番左端にいるこどもが声をかけてくる。
	C さん	記録者	C さんの作品が完成。透明なカップでカゴや自転車のタイヤを表現している。柴田さんが「めっちゃいいやん！」と言うと恥ずかしそうにしていた。
	A さん	記録者	A さん「先生、できたん？」記録者「できたよ。A さんもできたん？」A さん「できた。でももうちょっと何かつけようかな」と部屋の中にあるパーツ置き場を一緒に探す。ライターの上の部分が少し取れているものを見つけ、「この丸いところがいい」と席に戻る。
	A さん	記録者	作品が完成したので、キャプションカードを一緒につくる。作者名をつける際、石澤さんの説明を参考に「淀川テクニックさんは、本当の名前は柴田さんだけれども、作品を発表する時は淀川テクニックっていう名前を使ってはるねん。A さんもそんな感じで何か名前をつくったらどう？」と言うと「んー、じゃあ“図工の達人”にする」と答える。
	B さん	A さん 記録者	B さんは釣竿をつくっており、リールのハンドル部分をグルーガンでつくろうとしていたがうまくいかず他の物をつくっている。 記録者「これ、もうつくらへんの？」B さん「うーん」A さん「なんか別のパーツ持ってこようか？」B さん「うーん」A さん「ひももいるんちゃう？」B さん「そやな、ほな、ひもを持ってきてもらおうかな」A さんと記録者で、外にあるパーツ置き場に行き、ひもを取ってくる。A さんが B さんの隣に座る。B さんはひもを持ってきてもらってもあまりやる気が起こらず、グルーガンで蜘蛛の巣をつくっている。 記録者「ここ、もうちょっと補強がいるんじゃない？」と竿の部分を指さす。B さん「そうやな、ここもうちょい直すか」とグルーガンで補強。B さん「ひももつけてみよっか」とつけて、ルアーも紐の先に取り付けた。釣竿は展示用で、蜘蛛の巣は持って帰ることにする。蜘蛛の巣が壊れないように、透明なカバーをつけていた。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- 始まる前から温度が高かった。「作品を制作したい！展示したい！」と狙って来ていた。
- 序盤は温度が高くなりすぎて急いでいる感じがしたのでゆっくりやろうとした。よい意味で盛り上がりすぎた。
- 途中で落ち着いて一個ずつやりだした。なんでも任せず自分たちでやろうとしていた。途中から作業に集中している雰囲気だった。
- 出来上がりやつくり方のスタイルにそれぞれ個性があった。いきなり出来上がって面白いというのもあった。完成作だけじゃなくその途中も面白かった。
- 「ひもを切ってほしい」と言ってくるこどもがいたが、彼は最初からこういうものをつくろうと思っていたんだなと感じた。

こども食堂スタッフ

- 季節感のある作品をつくっていて「面白いなぁ、そんな発想があるんだ」と思った。３年生のこどもたちは、学校の授業で浴場（展示場所のひとつ）に行っている。それを見て想像力をかきたてられたのではないか。
- ずっと外で待機していたが、たまに部屋をのぞくと、こどもと柴田さんの距離感が近かった。外のパーツを持って「これ、（柴田さんに）切ってもらおう」と言って入っていった。
- 初めてのこどもでもしっかりつくっているのにびっくりした。前回は、作品ができてから（作品名を）何にしようと考えている感じだったが、今回は見て何かわかるものが多い。これで終わるのが寂しい感じもする。
- 今までは様子見だったのだろう。今回でこの地域のこどもらしさやパワーが出た。

財団スタッフ

- 柴田さんの作品が際立ち、「こういうことがやれるんや」と展示的になっていた。
- 「この人は普段何をしているでしょう」という谷岡さんに「新しいおもちゃをつくっている人」という答えが出た。良い意味で正解だ。本質的で良い。チラシを見て来たというこどももいて良かった。
- 保育園に展示してほしいという希望で、クリスマスツリーをつくったこどもがいた。
- アーティストネームは、みんな工夫している。妹の名前を組み合わせて作っている子どももいた。柴田さんの例（淀川テクニック）を挙げるとストンと理解できている。
- 今回のテンションの高さがワイワイ感に繋がった。声かけのハードルも下がっていた。大人たちの空気を察知していたのか。柴田さんとのコミュニケーションも見られた。
- 「（作品を）（どこどこに）置いてほしい！」というモチベーションがある。何をつくりたいか明確だったことも前回と異なる。

◉記録者による全体の所感

こどもたちが展示されている作品を見て、食堂で何をやっているのかがわかって、「これはやってみたい！」とやって来た、という心のプロセスを感じた。また、チラシを作成し、食堂スタッフの方も財団の方もかなり綿密に発信してきて、井上さんの「やっと今回、この地域のこどもたちのパワーを見られた」という言葉は、今回の試みが子どもたちにばっちりと「はまった」といえる。作品の言語化についても、前回より「こういうものをつくる」と目的を持って来ているこどもが多かったのでハキハキと話していた。

ワークショップ前にまちを歩いた際、まち自体は公園も多く建物のデザインが１つひとつかわいい印象を持った。人権ふれあいセンターなどでは様々な福祉サービスが充実している。駄菓子屋のおばさんはボランティア状態でお店を続けている。公共の施設、こども食堂、駄菓子屋など、いろんな居場所があるとよいと感じた。

今回は初めて参加者として子どもと一緒に作品を作りながらモニタリングを行った。初対面のこどもが多いなか、スタッフとして参加するよりも距離がぐっと縮まった感じがある。「それいいね！」「おもろいやん」と言ってくれる。教える人、見守る人よりも、同じ目線で一緒に遊んでくれる人がいるほうが、こどもは居心地がよいのかもしれない。

中に入ると、話しながらつくるこどももいれば、何も言わず黙々とつくるこどももいることが、よりはっきりわかった。ものづくりの現場は各々のたたずまいが多様で許されているように思う。

にしのこまんぷく食堂　記録３回目：2023 年 12 月 20 日（水）

時間	15:00 開場、鑑賞会 16:00 開始～17:00 終了（計 60 分）　※会場は人権ふれあいセンター		
参加者	こども（16 時～17 時半の鑑賞会の参加者）	15 人	男女の内訳は同数程度。年齢層は、小学 1 年生から 5 年生。途中退出は 2 人。
	食堂スタッフ	5 名	谷岡さん、加藤さん、その他食堂スタッフ 3 名（任意で入退出）
	財団スタッフ	5 名	石澤さん、土田さん、増田さん、常盤さん、川﨑さん
	その他の参加・視察者	69 人	大澤さん、着付け教室の方（人権センター利用者）10 人程度、保育園のこどもたち 25 人･先生 2 人､にしのこ芸術祭にご協力いただいた関係者 8 人､17 時以降展示を見に来たこどもたち 23 人。

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
15:00	こども	柴田さん	クリスマスツリーを制作したこどもが、自分の作品がどのように展示されているか見に来る。柴田さんが「どのタイミングでグルーガンをツリーの飾りに使おうと思ったの？」と尋ね、答える。妹が保育園にいるので「保育園にもう一度展示してほしい！」と言っていた。
	食堂スタッフ・財団スタッフ	こどもたち	参加者が少ないので、呼び込みに出る。
15:30	こども 4 人	柴田さん	11/15 のワークショップ（記録 2 回目）に参加したこどもたちがやってくる。柴田さんの作品を見て、「どうやってつくったん？」と触りながら尋ねる。
15:40	保育園のこどもたち		先生の引率で作品を見に来た。 「何これ？」と 1 つひとつの作品が興味深々だった。作品タイトルに「なんでそんな名前なん？」と聞いたり、柴田さんの作品のなかにマリオがいて「マリオや！」と叫んだり、思ったことがそのまま口に出ている。「にしのこの王」「宇宙人のブランコ」というタイトルに笑っていた。10 分ほど鑑賞して帰っていく。
15:45	こども		10/18 のワークショップ（記録 1 回目）の参加者 C さん、D さん、11/15 のワークショップ（記録 2 回目）の参加者 A さん、B さん、C さんが参加、C さんは妹と一緒にやってくるなど、徐々に増えてくる。
15:50	こども	柴田さん	自分がつくった作品を見つけて、「実はこれは爆弾なんだ」と話し始める。まだ始まっていないので柴田さんが「あとで教えて」と言うと「いやや」と返答。この時点で 15 人ほど集まる。校長先生が来る。

16:00	柴田さん	こども	鑑賞会スタート。柴田さんより「今日はみんなの作品の話を聞きたいと思っています。でもそんな堅苦しくないから大丈夫」と挨拶する。
	D さん・E さん	記録者	記録者の隣にいたこども 2 人が「これって、途中で抜けられへんの？体操クラブで友だちが待ってるねん」と言って途中で抜けるがまたすぐ戻ってくる。
	こども	柴田さん	柴田さんの作品紹介。動く《チヌ》の映像を見たときに「すげぇ」柴田さんが「動いたほうがいいから自転車でつくった」と言うと「たしかに」と返す。《アロアナ》の作品を川に流す映像でも「えっ」とびっくりしている。 岡山の宇野で撮影された《チヌ》を見た際、こどもから「何日かかったん？」と質問し、「1 ヶ月かかった」というと「やっぱ」と言う。こども「くさい？」柴田さん「臭くない洗ってるし、海水はそんなにおわない」こども「魚ばっかり（つくってる）やん」柴田さん「よい質問。魚はつくりやすい。最近は鳥とかペンギンとか犬とか、いろいろつくってる」柴田さん「犬の鼻の部分はプーさんのお尻。こっちから見たらおもろいんちゃうかなというのが好き」。 ムジカピッコリーノの紹介の際、「知ってる！」と言うこどもがいた。台湾の作品制作の映像が 360 度カメラで撮影したもので、こどもが「どうやって撮影してるの？」「目は何でつくってるの？」「作品は崩れへんの？」などと関心を示す。
16:20	D さん・E さん		また出てすぐ戻る。
	こども	柴田さん	これまでのワークショップの振り返り。こどもが「あ、これ俺（がうつってる）」「何これ？」柴田さん「何これって思うやろ？つくってる途中がおもろいねん」。 今日の鑑賞会のチラシを見て「俺の（作品）が載ってる！」「俺も 3 つとも載ってる」と反応。
	石澤さん	柴田さん	（D さん・E さんを指して）「早く帰らないといけないというこどもがいて」と相談。作品鑑賞にうつっていく。
	柴田さん	D さん・E さん	鑑賞会を始める。柴田さんがすぐ側にある作品を指して「これはだれがつくったの？」と聞くと、早く帰ると言う D さんと E さんが手を上げて「2 人でつくった」と返す。柴田さん「なんで 2 人でつくったの？」D さん「ひとりでつくるのが心配やったから」柴田さん「これはクリスマスのサンタクロースやんね？どのへんからサンタクロースつくろうと思ったん？」D さん「冬やから」柴田さん「このへんも 2 人でつくったん？」D さん「全部 2 人でつくった」。 柴田さんが他の作品を持って「これは何？“ふへくん”っていうの？興味ある名前と形なんやけれども」記録者と石澤さんで 2 人に話を聞き、「D が別の人と別の日につくったそう」と答える。 柴田さん「次は、2 人が気になった作品を教えてほしい」と言うが、なかなか今日出席しているこどもの作品が当たらない。

	こども		4 人が途中で抜けるが、何分かしてひとり戻ってくる。
	柴田さん	こども	「ビックリマンとそのこども」でやっと当たる。柴田さん「なんでびっくりしているの？」「目ん玉でびっくりしているから」またそのこどもが気になる作品を挙げる。
	D さん・E さん		自分たちの番が終わったため抜ける。
16:30	柴田さん	こども	11/15 のワークショップ（記録 2 回目）に兄弟で参加していた B さんの釣竿の作品が挙がる。柴田さん「これについて教えて」B さんが釣竿のルアーだと答える。柴田さんがコメントを読み上げ、こだわった部分を指差し「たしかにここすごいね。ほんまに使えそう」とコメントする。
	B さん	柴田さん	B さんが 10/18（記録 1 回目）のワークショップに参加していた中学生の作品を挙げる。柴田さん「パーツをどんどんつなげていくと見たことない形になっていくね」B さん「顔みたい」柴田さん「たしかに！面白いね。もう 1 個教えてもらっていい？」B さんが帰ったこどもの作品を挙げる。柴田さん「帰ってしまったけれども、これは僕が聞きました。これは海賊船。海賊好きなんって聞いたら別に好きじゃないけれども海賊っぽいものをつくろうかなってやってみたんだって。つくっている途中で鳥居かなとも言っていました。爆弾がどこかにあるそうです」。
16:35	柴田さん	こどもたち	この時点でこどもは 8 人になっている。「少なくなってきたので、自分がつくったやつを聞いていこうかな」と指名していく。
	柴田さん	こども	自転車の作品をつくったこどもに質問していく「自転車が好き？」こどもが首を振る。「最初から自転車をつくろうと思っていたのか、タイヤが自転車のタイヤに見えたのか、どっち？」記録者が仲介して「自転車をつくろうと思っていた」と答える。柴田さん「自転車って形が複雑だから、途中で気が滅入るんだけれども最後まで粘り強くつくっていてすごい。カゴもしっかりついてるね」。
	記録者	こどもたち	「みんなで作品のところに一緒に行こうか」と声をかけてみる。
	柴田さん	こども	柴田さん「これはなんですか？」こども「扇風機改造したマシーン」柴田さんがキャプションを読む。「いいね。設定が面白いね」。そのあと、またいくつかの作品をみんなで見る。こども「これは保育園のこどもにこわいって言われてた」柴田さん「目がかわいいね。こっちはテレビだけれども意思を持っている感じやね」。 柴田さん「MK13 ってなんですか？」こどもが携帯でモデルになった銃を見せる。柴田さん「ここが大事なんだね？そのこだわりすごい」。
	柴田さん	こども	柴田さん「他に何か気になるやつある？」こども「これ！」「ミニガンやって」柴田さん「MK13 と比べてどう？」A さ

			ん「こっちのほうが大きい」柴田さん「武器としてちゃんと再現されているね。他に面白いやつあるか教えてください」こども「一言感想で、面白いのがある」と柴田さんを連れていく。
16:45	中学生 5 人		中学生が入ってくる。こども「おれ、人間つくったぞ」石澤さん「これ？」こども「これ！」柴田さん「めっちゃかっこいいやん」
	柴田さん	こどもたち	柴田さんが鑑賞会を総括する。「みんなで何つくったのか聞けてよかったです。ゴミでつくってて、いらんもんやけれども面白いものに変わることを体感してもらえたと思う。でも、ゴミはどこまでいってもゴミ。そこが面白いと思ってる。最終的に目指してるのはゴミはゴミでも別の見方、こっちからだと違うように見えるっていうことが、自分で気づくとすごく面白くなることがある。みんないい目を持っているから、よりパワーアップしたら世の中面白くなると思う」
	谷岡さん	こどもたち	「改めて、関わってくれたみなさんにお礼を言いましょうか。ありがとうございました！」（一同御礼）「これからゴミのこと、気をつけてほしいなと思います」。
16:55			ワークショップを終了する。この後もお弁当を取りに来たこどもたちが展示作品を見に来る。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- 毎回、作品をみんなで見ることを大事にしている。今日は自分の作品、他者の作品を見て、みんなから意見を聞くことができた。
- こども食堂で、地域のなかでゴミジナル工作®（柴田さんが実施するワークショップの名称）をやるのは初めてだった。コロナ前は SDGs のイベントでやっていたが、1 分でできる子、5 時間くらいかかる子、様々なので最後に今日みたいな場は持ちづらかった。
- 個々で自由に鑑賞するとなると、僕だけが知っていることになる。地域とこどもたちの交流を大事にと思っていたので、作品を介して、ゴミを通してコミュニケーションがたくさんあったことがよかった。
- 社会問題としてのゴミももちろんあるが、「こんなふうにしたらおもろいよね」と投げかけていきたい。

こども食堂スタッフ

- 恥ずかしがり屋なこどもが多いので、質問しても答えが返ってこないことが多いが、今日は意見が言えていてすごいと思った。ものづくりのよさかと思う。また、地域の大人が見に来てくれたのがよかった。
- ４回を通して、うちのこどもたちに合ったワークショップを提供してくれた。また、展示してくれた施設の人たちの理解があってよかった。地域でつくりあげた取り組みになった。

財団スタッフ

- 完成したら興味がなくなるこどももいるなかで、クリスマスツリーの子は保育園に飾ってほしいという目標を持っていたことが印象的。こどもによって考え方が違うことが気づきとしてあった。
- 保育園のこどもたちが来ていた時、入った瞬間から「何これ」「保育園に置いてた」などたくさん話していた。展示していたことを認識していたことがよかった。
- これまでのワークショップに参加していないこどもも来ていた。最後のほうは 6 年生が「1 回だけつくった」と言って来た。すぐ自分がつくった作品に近づいていったことがうれしかった。

- 後半から、椅子に座っている状態からみんなで見に行く状態になり、その際にそれぞれ見たいところに行った。どこも 2 人以上で見ていて、柴田さんが聞いているメインの集団以外にいくつかできていてよかった。
- なかなかしゃべらないこどもが近くで聞くとよく話していた。他の作品についても話していた。
- にしのこ芸術祭では、ノリノリで置き場所を提案してくれる施設の方もいた。こどもたちとちゃんと回りたいと思いツアーを組んだところ、最初は 2、3 人だったが、駄菓子屋さんの前にこどもが溜まっていて、そこで「おれもいく」と急に大軍団になった。
- 耳原病院では外から見る時に作品を外から見えるようにしてくれたり、施設職員さんから「すごいね」と言葉をもらったりした。布袋湯は作品をライトアップしてくれていた。作品をつくる喜び、見てもらう喜びを味わって、ここ（にしのこ美術館）に帰ってきている。
- （全体を通して）このワークショップはいつ来てもよいし、いつでも帰れる余白があったのがよかった。これまでの造形プログラムでは工程管理や材料準備から時間や参加人数が決められていることが多かったが、このように自由に参加・退出できる形態で実施できたのは財団にとっていい経験だった。こども食堂の特性に応じた柔軟な対応が必要だと感じた。

◉記録者による全体の所感

今回は今までと会場が異なり、かつ鑑賞会というこどもにとっては馴染みのないことを試みた。発表と聞くと苦手意識があるのか、話が長いと感じて面白くなくなったのか、その場から立ち去るこどももいた。けれども、みんなでひとつの作品を見て、いつも一緒にいる友だち同士でも「そんなことを考えていたのか」と新たな発見や感想が生まれることを体験できたと思う。特に、一番前の列で柴田さんとやりとりしていたこどもは素直に、柴田さんや他の参加者の話に聞き入っていた。柴田さんと会うのが 2 回目以上のこどもたちは、すごく場に馴染んでいて、柴田さんと友だちのようにコミュニケーションをとっていた。

ただ、10 人以上のこどもたちが集まって、かつ出入り自由ななか、どのような形で鑑賞会を実施すればよかったのだろうかと悩ましいが、作品をただつくっただけではもったいなくて、みんなで作品のエピソードを聞くことは重要だと思う。学校のような教育現場ではないところで、どうすれば発表者も聞き手もリラックスしてその場にいられるか、個人的にも考えていきたい。

3. PROJETO CONSTRUIR KODOMOSHOKUDOU

記録者	馬淵悠美	会場	民家（こども食堂会場）
進行役・進行アシスタント			
進行：大熊ねこ（パンダさん）　アシスタント：池川貴清（池ちゃん）、はせなかりえ（りえさん）			
記録に関する補足説明			
1 回目	2023 年 10 月 14 日（土） 前年度のこども食堂「ここなら」への芸術家派遣事業（アーティスト：神永真美さん）にてアシスタントをしていた大熊ねこさんが進行役のアーティスト。今年度、大熊ねこさんのアシスタントはお二人とも演劇関係者で、第 1 回目から引き続き参加している。子どもの参加者は前回も参加していた子がほとんどで、なかには血縁関係のある子も多い関係性の濃密なコミュニティである。 実施会場の民家は、一般的な一戸建て住居で、1 階はおもちゃなどのある部屋が 2 部屋と、キッチンとダイニングのある部屋が 2 部屋、2 階はワークショップ会場にもなっている 2 部屋が繋がった部屋。その他にも部屋があるように見受けられる。		
2 回目	2023 年 11 月 4 日（土） 初回から参加していた池ちゃんが今回で最後のアシスタント。		
3 回目	2023 年 12 月 8 日（土） 事前にメールで今日はスペシャルデーでランチもスペシャルだと伝えられていた。		

PROJETO CONSTRUIR　記録１回目：2023 年 10 月 14 日（土）

時間	11 :00 開始～12:00 終了（計 60 分）		
参加者	こども	6 人	男女比はほぼ半々、年齢層は幼稚園から大学生まで。
	食堂スタッフ	6 名	田中さん　他 5 名
	財団スタッフ	3 名	土田さん、増田さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	1 名	財団理事長

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
11 時頃	アーティストたち	こどもたち、お母さんたち	参加しないかと声をかけにいく。こどもたちとお母さんたち 2 階に上がってくる。 前回からの参加者は柱に貼っている名前（本名ではなくても可）を書いたテープを回収し服に貼る。新規参加者はテープに名前を書いて服に貼る。 それぞれ壁に沿って円のように置かれたマットの好きなところに座る。
	パンダさん	参加者（こどもたち、保護者たち、食堂スタッフなど、その場に入る人たち）	「みんなの名前を聞きたい。今日は自分のポーズと名前を教えて。誰かのポーズを真似してもいいよ」。 一周するなかで、戸惑ってしまったり自分でうまくポーズが考えられない人、気分がはまらず渋る子もいるが、参加者同士で助け舟を出したり、そのままにしておいてあげたりなどする場面が何度かある。
	パンダさん	参加者	しりとりを提案する。しりとりを知らない人も何人かいる（とくに保護者）ので参加者がポルトガル語で、それぞれ近くにいる人にしりとりの説明を訳してくれる。 〈特別ルール〉 ・「ん」がついても大丈夫。 ex.パン→パンダ〇 ・前の人と同じこと言っても大丈夫。 アシスタントの人たちが参加しやすいようにルールを横から付け足していく。
	パンダさん	参加者	しりとりが言葉からだんだんジェスチャーのみに。自然発生的にジェスチャーに変わっていき、思いついた人が真ん中に出て体でやるように。
	パンダさん	参加者	しりとりを 2 チームに別れてみんなで体で表す。 1 チーム目「海」→2 チーム目「未確認飛行物体」。それぞれ各々が何を担っていたのか、なぜその言葉になったのかパンダさんからインタビューが入る。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- （前回あった椅子を１階にどけてくれていたので）言葉だけでなくジェスチャーも取り入れてみんなで体を動かしたいと思った。床に座っていることで安心感があって、立つよりも座ったままできることをと思った。立ち上がろう！としなくてもよいかと思った。
- 「しりとり」は日本のポピュラーなゲームであり、ポルトガル語が混ざってもよいし、知らなかったことも知れるし、見て参加してくれるのも嬉しい。
- 下に座ってみんなとより繋がっている気がした。大人も混じってくれて恥ずかしいと言いながらやってくれようとする姿が嬉しかった。近づけた気がする。
- 進行はすごく楽だと正直に感じた。こどもがこどもをサポートしてくれている。こどもたち同士、離れていてもサポートし合っていた。
- 前回（9/16 のワークショップ）のフルーツバスケットでも自分たちで自分たちがやれるルールをつくることがみんなできる。今日はそれも溶け合ってさらにゆるくなっていった。今日のしりとりでの「海」はすごくちゃんと海に見えた。やりたいことをやって、なりたいものになれることを体験してほしい。

こども食堂スタッフ

- 人間関係をずっと一緒にやってきていて、小さい頃からお互いを見てきている。助け合いを大切にしている。
- （大人から見て）ちょっとこの子を止めたほうがいい？という子も誰か別の子が行って止めたりする。自分がその立場になって考えるのが大切だと思う。
- 大人のサポートも考えているのでお母さんたちが入ってくれて良かった。今日の参加人数が少なくて、お母さんたちに入ってほしいと言った。
- 以下、こどもの普段の様子やワークショップでの変化についてのコメント。
  - A さん：しりとりを知らなくて学校で一緒に遊べないと前に言っていた。今日はすごく自分から単語を言っていた。できることで一緒にやったらいいと思う。初めて参加してきっと楽しかったと思う。
  - B さん：こども食堂に来るのが今日で３回目で、初めは泣きながら来たのが、今日は自分から参加した。
  - C さん：恥ずかしがり屋で声が出ない子だと思っていたが、前回は声を出して自分で何か言おうとしていてびっくりした。
  - D さん：前回（9/16 のワークショップ）のあと、アーティストたちの名前を言っていたり、始まる前にパンダさんに、パンダの絵の描いた石をプレゼントして、驚いた。
- 外国から来ている子たちは学校で悲しんでいる。このワークショップは遊んでいるけれども遊んでいるだけではない。自分を出している。
- いろんな場所でいろんな体験をして、ここでみんなと過ごして、それを外から来た人が肯定してくれることは大切だ。ゲームをするときにルールがガチガチではなく、勝ち負けでもなく、受け入れ合えたのがよかった。

◉記録者による全体の所感

アーティストや財団の大人とこども食堂の利用者・実践者の関係性はワークショップのファシリテーターと参加者を越えて、友情に近い。Instagram をフォローしてきてアーティストにメッセージを送ってくるような子もいるし、大学生の年長の男の子は年の近いお兄さんのようにアシスタントの池ちゃんのことを慕っていたりする。だからこそ視点がばらつき、また空間の狭さから参加が必須で観察は難しかった。

PROJETO CONSTRUIR　記録２回目：2023 年 11 月 4 日（土）

時間	11 :00 開始～12:00 終了（計 60 分）		
参加者	こども	7 人	新規の参加が 1 人。
	食堂スタッフ	3 名	田中さん　他 2 名
	財団スタッフ	2 名	常盤さん、川﨑さん
	その他の参加・視察者	6 人	大人の参加　新規 3 人

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
10:39	こどもたち		最初に 3 人くらいこどもたちが 2 階に来て、その後こどもたちがちらほら入ってきて、テープに名前を書き、柱から自分のテープをとる（参加したことがある人のネームタグは捨てずに柱に貼り付けてある）。年上の子たちが「ここにテープあるよ」などと場づくりを手伝ってくれる。「椅子取りゲームしたい！」などこどもたちがパンダさんに内容を提案する。パンダさんのことを「先生」と呼ぶ子がひとりいたが、ほとんどは「パンダさん」と呼んでいる。「学級閉鎖があって職業体験に挨拶なしで行かなあかん！最悪！」などと高校生くらいの子たちが学校のことをパンダさんに話している。ひとりで部屋の隅にいて、おもちゃで遊んでいる子もいる。
10:59	パンダさん	参加者	1 階に降りて呼び込みをする。
11:03	参加者		床に敷かれたマットにほぼ全員が円になって着席する。自然発生的に初参加のＡさんがその場にいるみんなの名前を聞いていく。Ａさんがネームタグを読むのをみんなが手伝う。その間にみんながお互いの名前を知っていく。
11:06	パンダさん	参加者	名前を呼ぶ。改めてみんなに名前を聞く。本人が「～です！」と言い、みんながそれに呼応してその人の名前を呼ぶ形で進められ、一周する。
11:11	参加者		拍手まわしをする。①右にまわす、②左にまわす、③左右自由。隣の人から拍手を受け取り、また隣の人に拍手をまわすという、拍手をテンポよくまわしていくワーク。③になったときも初めは隣の人にまわしていたが、田中さんが対角線上にいた人に拍手をまわしたことを皮切りに縦横無尽に拍手を届けあうゲームに発展する。
11:15	参加者		握手で交代する。「せーの」で右か左に向き、もし隣の人と向き合えば握手して場所を交代する。もし向き合わなければ正面に向き直ってステイする。場所がシャッフルされる。
11:20	参加者		ひとりが前に出て、その人がやったことを他のみんなが鏡のように真似をする。パンダさんからスタートし、次の人を指

			名していくが、途中「自分がやりたい」と立候補する子も何人か出てくる。 パンダさんの次に前に出た池ちゃんが「家でテレビを見ながらゴロゴロし、大笑いしたり泣いたりする」というジェスチャーをおこなう。その次にやりたいと前に出た 10 歳ほどの B さんが、途中までアクロバティックに動いていたが、途中で家に帰ってテレビを見る動作をする。さらにその次に前に出た大学生の C さんは途中までバイトの動作をしていたが、そこから途中で家に帰ってテレビを見る動作をする。
11:31	パンダさん	参加者	同じものを好きな人を探して集まる「共通点探しゲーム」をする。グループになったらパンダさんがそれぞれみんなに何のグループか、どうして好きかをインタビューする。①季節、②色、③おにぎりの具。
	参加者		共通点探しの延長線で、ジェスチャーだけで年齢順に並ぶ。初めはパンダさんが誕生日順に並ぼうと呼びかけたが、数人から「日付の表記の仕方がブラジルと日本では異なるのでジェスチャーだけでは混乱が起きるかも」とアドバイスしてくれて、年齢順に変更する。真ん中の位置が 24 歳くらいの年齢幅だった。
11:56	パンダさん	参加者	感想を全員で共有する。鏡のように真似をするところで、「家でテレビをみながらゴロゴロする」のくだりが面白かったという感想が多く、また後半からジェスチャーで感想を伝える流れができて、それぞれの形で「〇」や「♡」で感想を伝えていた

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- 身体を使いたいと思っていた。前回は円になってワークをしたのでもっとシャッフルしたいとも思っていた。
- みんな同時に表現しあって結果的に仲間になるみたいな感じで、かき混ぜたい。大人がたくさん来てくれて良かった。彩りが出た。（おにぎりの具でマグロと言ってひとりでいる人とツナのチームがあって、お互いが違うと言った場面について）誤解が生じたのも面白かった。エラーもひとつの楽しみだと思う。
- 誕生日でやろうとしたときに「もう年齢にしよ！」って言ってくれて助かった。
- （拍手で交代のワークについて）誰にもコントロールされているわけではないし、偶然だから自分で選んでいるわけじゃない。その偶然と非コントロール感のバランスがよい。
- みんながどんどんやりたいことを言ってくれたり、新しいルールをつくってくれたりする。みんなが主役になって自分たちがついていくくらいでよいし、もっとみんなそのままでいてほしい。リーダーが自然と変わっていくのがよい。
- 特別なことやらなくても「自分たちの日常そのままでよいんだ」と伝わって良かった。
- 勝手にゲームを自分のものにしている。（拍手まわしで）勝手に対角線に飛ばし出して、「次はこういうことしましょうか」としなくても次のステップにいってくれる。楽しみ方を知っているし、開かれている。
- （この日の途中ワークショップから外れてしまった子について）落ち込んだままでもこの場にいれるし、いつでも入ってこられる。拗ねながらもワークやって前にも立っているし、顔は暗いけれども参加していた。
- ワークショップをするという立場でコーディネーター感を出して「今日だけの人」みたいになるのは苦手で、対等、友だちでいたい。C さん（みんなのお兄さん的存在のお手伝いもしてくれているこどものなか

では年長の大学生）は「連れ」くらいに思っているかも。今日もまず「毛、染めてるやん」と言われた。アシスタントはスムーズに進めるための存在だと思っている。

こども食堂スタッフ

- 今日は毎回参加してくれていた兄弟たちが休みと聞いていたので、数日前に初めて遊びに来てくれたＡさんを誘ってみたら来てくれた。
- Ｄさんのお父さんは、興味はなかっただろうけれどもいつもひとりで下にいたので「人数少ないからおいで」と誘ってよかった。自分はこどもに厳しすぎると悩んでいるので、こどもを信じてあげてと思っていた。今日一緒に遊べたのは良い機会になったと思う。
- （Ｅさんがこの日は拗ねて輪の外に出たり、他の人からのパスに反応しなかったり、でも途中でまた入ってきたりという参加の仕方で、他のこどもたちが参加できるようにＥさんのこと気にかけてあげたりしていた場面を振り返って）Ｅさんが輪からはずれたりしていたら、いつもだったらＥさんのお父さんが必ず態度を注意する。それがなかったからＥさんが自由に拗ねていた。心が柔らかくなっている感じがした。
- 円になって向かい合ったら握手で入れ替わるワークでは、みるみる景色が変わって面白かった。
- Ｃさんはしっかりもの。池ちゃんと話しているとき、完全に肩の力抜いている。Ｃさんは自分自身のままで楽しめている感じがする。
- （この日はお馴染みのメンバーの休みが多く、新しいメンバーが多かった）メンバーが入れ替わってよかったかも。
- みんな学校では箱に入っているみたいで自分を出せない。お父さんお母さんも言葉の壁で苦しんでいる。ここではどんな壁もつくらない。誰も仲間外れにしない。
- いつも放課後の授業は立ってしない。リーダーはどんな役か自分たちで考える。今日のワークでも色や季節とか好きなものが違っても「全部いいね」と言える。「ええ？」とか言わない。そういうことが絶対人生の役に立つと思う。安心感は学習意欲にも繋がる。

財団スタッフ

- 遊びの進行役等について、次に誰がやるかをアーティストが指定しなくても、こどもからやりたいと手が上がり、自然と回っていた。
- テレビのリモコンの動きも前の人の動きを受け取っている感じだった。
- 初めて来たけれども、すごくアットホームでこの空間もみんなも、自分も人見知りするけれども自然に参加できるような場所だった。年齢もルーツも関係なく楽しめてよかった。
- いままでこども食堂でやってきてここまで年齢層が広いのははじめて。
- ちょっと拗ねていてもそのままいられるのは、場づくりにも繋がっている。演劇では「その場にいるお互いのことを感じる、分かろうとする、そうした関係性の中でともに作品をつくる」ことを大切にしていると、以前パンダさんが話していたことをそのまま感じた。

◉記録者による全体の所感

大人の参加人数が増えた。全く日本語の話せない人も、逆にポルトガル語がわからない人もいるなかでほんとうに「みんなで遊んでいる」というような雰囲気が生まれている。こども食堂という形ではあるがそれを越えて、田中さんの大きな愛と行動力をもとにどんな人も受け入れるサードプレイスのようになっている。実際毎度知らない訪問者が老若男女いたりする。ワークショップの雰囲気がみんなが自ら遊びに参加していくようなものであるのもこの食堂のあり方がベースにある。

食堂を運営する団体のフルネームはPROJETO CONSTRUIR ARTELでCONSTRUIRは「つくる、組み立てる、みんなでつくる」ARTELは”ART”“EDUCATION”を組み合わせたポルトガル語の造語とのこと。

PROJETO CONSTRUIR　記録３回目：2023 年 12 月 8 日（土）

時間	11 :00 開始～12:00 終了（計 60 分）		
参加者	こども	11 人	年齢層は 7 歳から 19 歳。
	大人	6 名	代表の田中さん、兄弟、保護者 年齢層は 24～60 歳くらい
	財団スタッフ	2 名	土田さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	1 人	途中から訪問の大学生

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
10:25	アーティストたち､財団スタッフ		到着、準備運動しながら打ち合わせ。
10:35	こどもたち		一度こどもたちが 2 階に遊びにくる。(9/16 のワークショップでやった）なんでもバスケットを「やりたいんだけれどもやる？」とパンダさんに聞きにくる。パンダさんは「なんでもバスケット好きやなあ、でもやらんよ～」と返す。まだもうすこし時間あるからと田中さんが 1 階にこどもたちを連れ戻す。
11:03	パンダさん		1 階にみんなを呼びに行く。人が集まってきて名札を用意したり、各々集まって話したりしている。
11:10	パンダさん	参加者	開始。「今日は最終回ですね」「とりあえず名前言ってくのやろう」。名前を自分で言い、みんなでその名前を呼ぶのを一周する。
11:19	参加者		立ち上がる。握手で交代。パンダさんの「せーの」の掛け声で右か左に向き、もし隣の人と向き合えば握手して場所を交代する。もし向き合わなければ正面に向き直ってステイする。場所がシャッフルされる。
11:22	パンダさん	参加者	パンダさん「ビビリビビリバというゲームを今日はやってみます」。ルールは、参加者が円になって、ひとりが円の中に立つ。中にいる人が外円の誰かに向かって「ビビリビビリバ！」と言う。言われた人はその人が言い切る前に「バ！」と言えたら勝ち。間に合わなければ交代する。中の人に「バ！」のみ言われたときは何も言わない。反射で「バ！」と言ってしまったら交代する。 小学校低学年くらいの A さんと B さんは自己紹介のときも「双子です！！」と言うほど放っておくと片時も離れない。それによって他の同年代の子たちが刺激されケンカになったりもするが、年上の子たちや大人たちが自分たちの判断でゲームに則り随時二人を引き離そうとしてくれる。

11:30	パンダさん	参加者	ルールに「エレファント」が追加される。「エレファント！」と言われたら両隣のひとを含めた 3 人で 5 秒以内に「エレファント」のポーズをする。
11:39	パンダさん	参加者	ルールに「トースター」追加。「トースター！」と言われたら両隣のひとを含めた 3 人で 5 秒以内に「トースター」のムーブをする。
11:46	パンダさん	参加者	ルールに「クェブラードトースター」追加。「クェブラードトースター！」と言われたら両隣のひとを含めた 3 人で 5 秒以内に「クェブラードトースター」のムーブをする。 パンダさんは「ブロークントースター」と言ったが、それをみんなが近くの人にポルトガル語に翻訳していた。パンダさんが「ブロークンはポルトガル語でなんて言うの？」と聞いて「クェブラード」と教えてもらい「クェブラード」で定着した。 こどもたちのなかにはポルトガル語を話せない子もいて、ポルトガル語がほぼできない C さんが当たったときに D さんが「ポルトガル語じゃなくてもいいよ」と声をかけていた。
11:49	パンダさん	参加者	ルールに「オペラ」追加。「オペラ！」と言われたら両隣のひとを含めた 3 人で 5 秒以内に「オペラ」のムーブをする。
11:51	参加者		最後にパンダさんが中に入ってこれまでのラインナップ全てを順番にやっていくメドレー。
11:58	パンダさん	参加者	「4 回やってきたので、最後に感想を聞きたい」。
12:08			ワークショップを終了する。この日はスペシャルランチにブラジルの市場などで使われているサトウキビを絞る機械を提供してくれた人がいてサトウキビジュースづくりと教員であり腹話術マジシャンの方によるマジックショーがあった。その後、ワークショップが最終日であることや、PROJETO CONSTRUIR の軌跡、その他の訪問者の方々への感謝などを込めて、ひとりのお母さんがつくってきてくれたケーキでお祝いをした。最後はいろんなところから来た人たちが混ざり合ってお祭り騒ぎだった

◉保護者・こどものコメント（終了後の聞き取り）

- 中学 1 年生の C さんは、両親はブラジル人だが本人はあまりポルトガル語は話せなくて、お母さんはあまり日本語が話せない。そのため、お母さんと込み入った話をするときは Google 翻訳で話している。
- E さんのお母さん（ブラジル人でポルトガル語ネイティブだが E さんが日本語しか話せず一生懸命日本語を習得した）によると、E さんは本当に人見知りで人とうまく話せないので心配していたが、今日のワークショップではちゃんとゲームに参加して真ん中に立ったりもしていて感動した。
- E さんは記録者目線でも最も変化の大きかった子。はじめはみんなの前で自分の名前を言うことも躊躇われていた。回数を重ねるごとにこの場への信頼が増していくのが感じられたし、C さんのサポートもあって、彼女なりの遊び方や居方ができていった。アーティストたちとも「関係ないかもしれないけれども心を開いてくれたような気分になった」と話していた。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- 回を重ねるごとに安心してくれる、私に慣れてくれる、お互い気をつかわなくなっていくのを感じた。
- 良い意味でルール説明のときも、ポルトガル語に通訳してとこっちがお願いしてと音頭をとらなくても各々が勝手にやってくれる。
- 何を目指すかではなくどう時間を過ごすかということを大切にしていた。それが「染み込んで」いった気がする。
- 今日はすごく複雑なゲームなのにできた。4 回目だからこそできたと思う。
- 何か変化を望むというより「このままでいいんだ」と伝わっていたら嬉しい。「みんなそのままで最高じゃん！」と思ってほしい。

こども食堂スタッフ

- 4 回で終わりと言ってもまたいつか来てくれる、来なくても何かつながりがあると感じられている。
- 外国から来た子にはシネマやショーを見るチャンスがない。日本に来たらなおさら行かないし、日本のテレビも見ない。だからこそここであったことは絶対忘れないと思う。
- F さんは自分の名前を言うのが恥ずかしいというのが癖になっているが、できるようになってきている。
- G さんはこの 4 回で大人になったと思う。面白いことするけれども自分からするようになった。前はお母さんの目を気にしてやっていた。たぶん小さいときから面白いと言われていたけれども、今回で自分ができるとちゃんと思えたのではないか。
- 最初は（大人の人たちから）「どんな内容のワークショップ？」と聞かれても自分もわからなかった。10/14 の回（記録の 1 回目）に何人か参加して、11/4 の回（記録の 2 回目）になるとみんな自分から参加するようになっていた。

財団スタッフ

- 大人がこどもと同じ目線で一緒に対等に遊べている。初めて実践する場所にワークショップの内容を説明して事前にわかってもらうことは難しい。やりだすと「こんな感じね」と思ってもらえるし、自分たちもやってみて改めて理解できることがある。
- 初参加の子も輪に入っていてよかった。大人の表情も明るくて「今日は何をするんですか？」と自分から聞いてくれる。こどものサポートをしに来ましたではなく、本人が楽しみに来てくれている。

◉記録者による全体の所感

変化に関しては長期的に見ている田中さんの視点に支えられる調査だった。田中さんの場づくりにより、アーティストや財団スタッフ、記録者も外部講師のような扱いではなく、友人として迎えられ、そこにいる人たちと個人的関係を築いていくような時間だった。

参加してくれた人々の変化は大きく、ただそれがワークショップの開催やそれに伴って訪れる人々に慣れたからなのか、本人たち自身に変化があったのかは記録者目線では確信が持てない。しかし、田中さんの言葉は記録者の主観では信頼できると感じられ、その田中さんが「みんなはこの時間を絶対忘れないと思う」と繰り返し語っていたことから、みんなの変化にワークショップは影響を与えていたのだと思う。

世代も国籍も使用言語も超えていたこのワークショップは、田中さんのつくってきたコミュニティの態度と、そこにパンダさんたちアーティストと財団のみなさんが柔軟に呼応できたからこそ成立したと思える。なかなか見られない稀有な現場だった。

4 回のワークショップの最終日には、この事業と関係のない知り合いがサトウキビジュースをつくる方に誘われて訪れていて、田中さんがいかに外にひらく場づくりをしているかよくわかった。それくらい閉じたコミュニティではなく開かれた「こども食堂」という機能の垣根を越えた場だった。

IV. アンケート調査

1. アンケート調査の概要

(1)調査対象

いづはまスマイル食堂、にしのこまんぷく食堂、PROJETO CONSTRUIR の 3 団体で実施する「子ども食堂における芸術家派遣事業」に参加したこども、保護者。

(2)調査方法

調査票の直接配布、直接回収。なお、3 つの団体ではそれぞれ 4 回のワークショップを行い、参加や欠席は任意で、アンケートは参加者各自の「初回」の参加と「最終」の参加の際に配布・回収を行った。なお、1 回のみの参加の場合、ワークショップ 4 回のうち、前半（1･2 回目）の参加は「初回」に分類し、後半（3･4 回）の参加は「最終」に分類した。

(3)調査期間

令和 5 年 8 月 6 日～令和 6 年 1 月 6 日

(4)回収数

145 件

(5)回答者の構成比

こども/保護者の区別

こども	109 件（75.2%）
保護者	36 件（24.8%）

実施施設

いづはまスマイル食堂	78 件（53.8%）
にしのこまんぷく食堂	32 件（22.1%）
PROJETO CONSTRUIR	35 件（24.1%）

初回/最終の区別

初回	84 件（57.9%）
最終	61 件（42.1%）

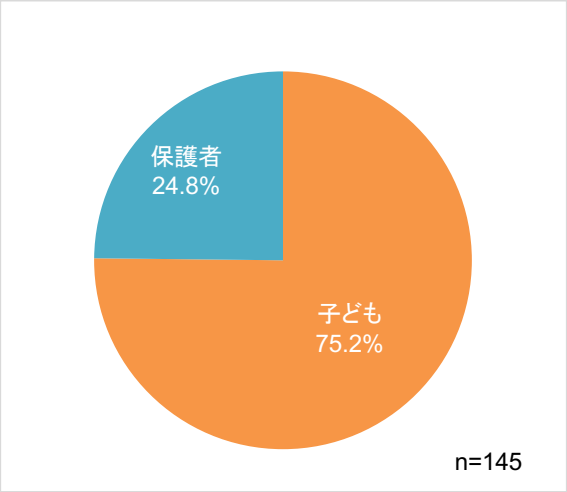
(6)調査項目

- 性別、年齢
- こども食堂に初めて参加した時期、こども食堂に参加した回数
- 普段の芸術文化にふれる機会、こども食堂のお手伝いをした経験
- こども食堂がきっかけでの会話、安心できる場所
- こども食堂での出会い、こども食堂で初めて経験したこと
- 自分自身について、イベントに参加して感じたこと

2. 調査結果

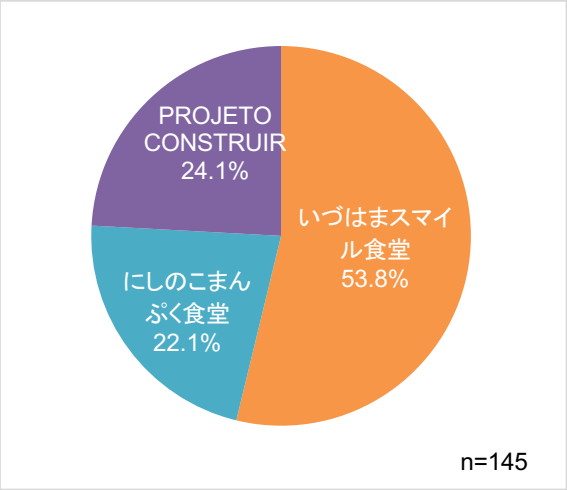
(1)調査対象

- アンケート調査は「こども」と「保護者」を対象とした2種類の調査票を用意しており、両方の調査票の合計で145件の回答があった。そのうち「こども」は75.2%、「保護者」は24.8%となっている。



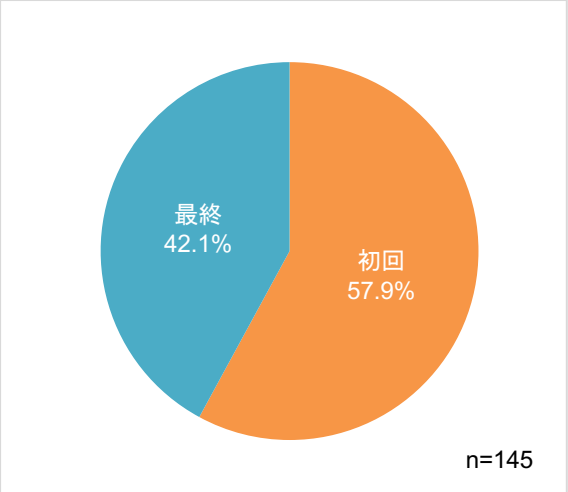
(2)実施施設

- 回答者が参加した会場は「いづはまスマイル食堂」が53.8%、「PROJETO CONSTRUIR」が24.1%、「にしのこまんぷく食堂」が22.1%となっている。



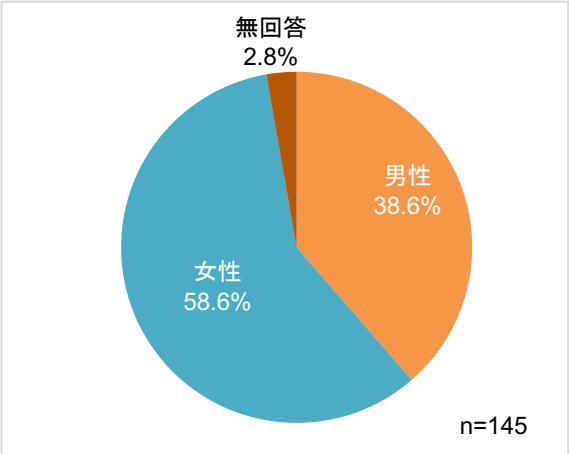
(3)回答の初回/最終の区別

- 3つの団体ではそれぞれ4回のワークショップを行い、参加や欠席は任意で、アンケートは参加者各自の「初回」の参加と「最終」の参加の際に配布・回収を行った。「初回」の回答は57.9%、「最終」の回答は42.1%となっている。



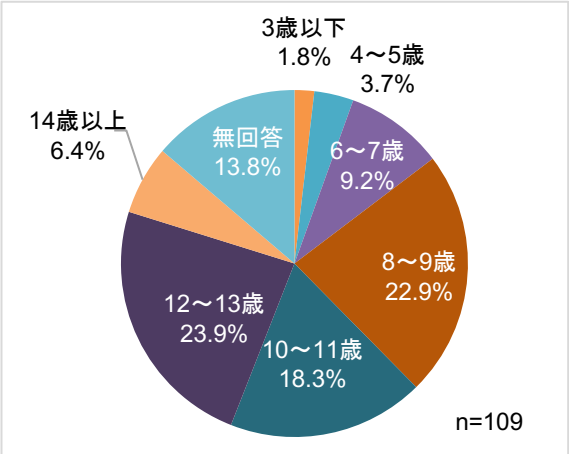
(4)性別

- 回答者の性別は、「女性」が 58.6%、「男性」が 38.6%となっている。

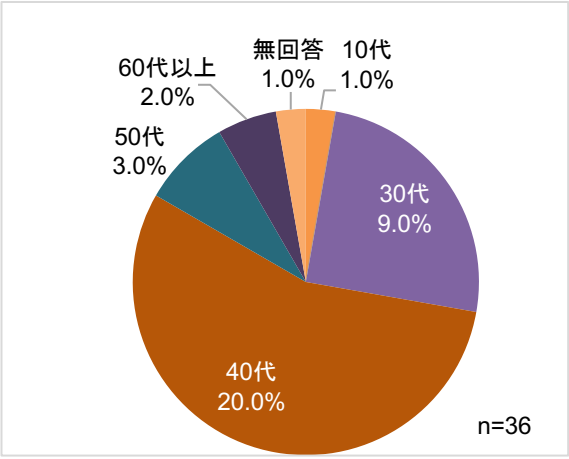


(5)年齢

- こどもの回答者の年齢は、「12～13 歳」が 23.9%、「8～9 歳」が 22.9%、「10～11 歳」が 18.3%で、8 歳から 13 歳までの割合を合わせると 65.1%となっている。なお、年齢の平均値は 10.0 歳となっている。

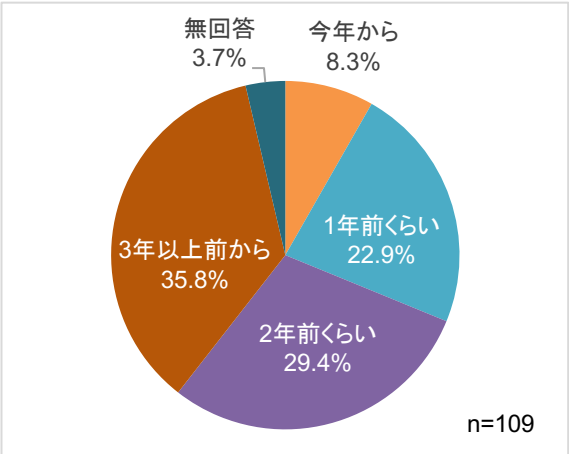


- 保護者の回答者の年齢は、「40 代」が 55.6%、「30 代」が 25.0%となっている。

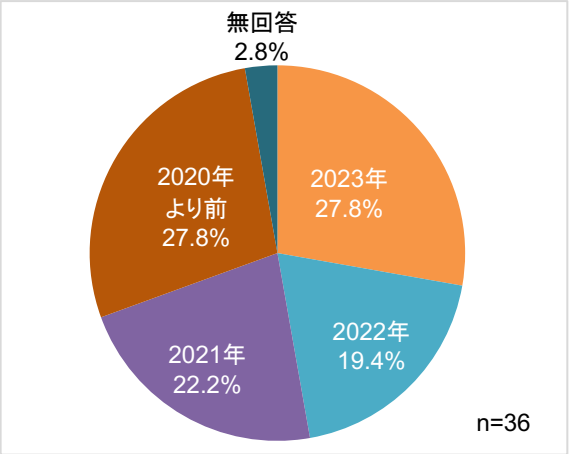


(6)こども食堂に初めて参加した時期

- こどもの回答者に初めてこども食堂に参加した時期を聞いたところ、「3 年以上前から」が 35.8%、「2 年くらい」が 29.4%、「1 年前くらい」が 22.9%となっている。

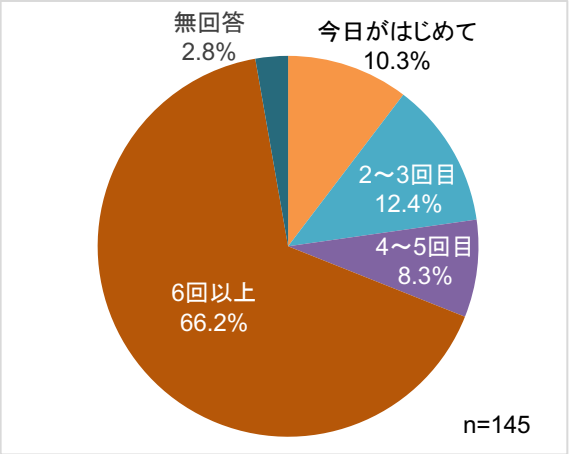


- 保護者の回答者にこども食堂に参加した時期を聞いたところ、「2020 年より前」と「2023 年」が 27.8%、「2021 年」が 22.2%となっている。



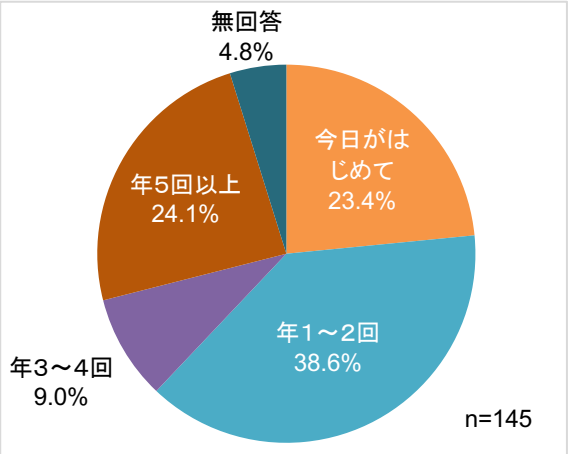
(7)こども食堂に参加した回数

- こども食堂に参加した回数は、「6 回以上」が 66.2%、「2～3 回」が 12.4%、「今日がはじめて」が 10.3%となっている。



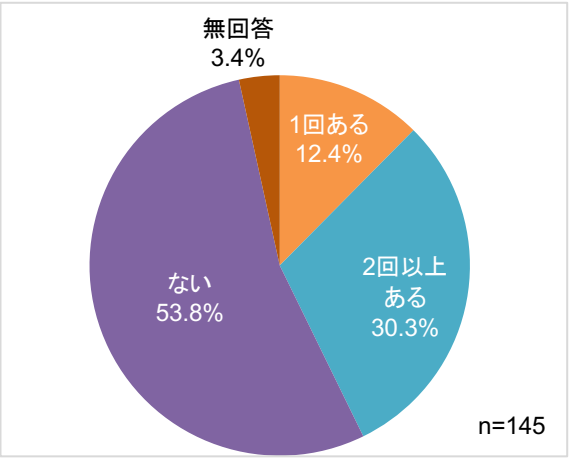
(8)普段の芸術文化にふれる機会

- 「普段、音楽や美術などの芸術文化に触れる機会がありますか？」と聞いたところ、「年 1～2 回」と回答した割合が 38.6%、「年 5 回以上」が 24.1%、「今日がはじめて」が 23.4%となっている。



(9)こども食堂のお手伝いをした経験

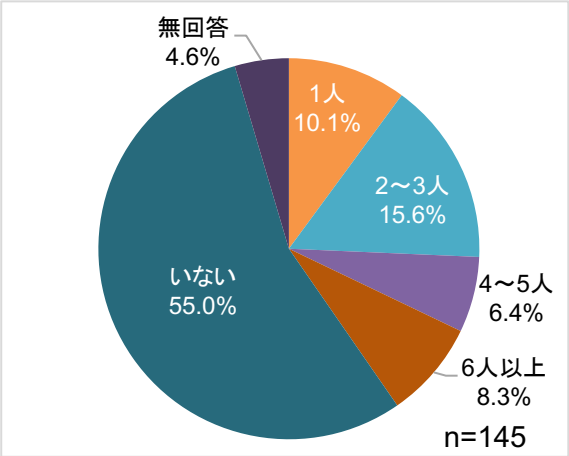
- 「こども食堂のお手伝いをしたことはありますか？」と聞いたところ、「ない」が 53.8%、「2 回以上がる」が 30.3%、「1 回ある」が 12.4%となっている。



(10) こども食堂がきっかけでの会話

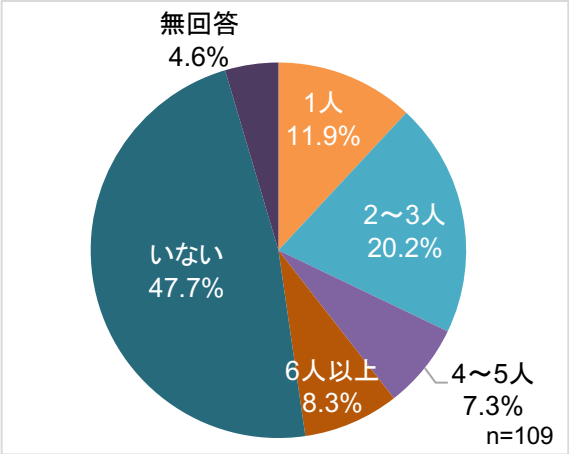
① 同じ学校の同じ学年のこども

- こどもの回答者に「こども食堂がきっかけで、話すようになったこどもは何人いますか？」という質問をしたところ、「同じ学校の同じ学年のこども」については「いない」が 55.0%、「2～3 人」が 15.6%、「1 人」が 10.1%となっている。



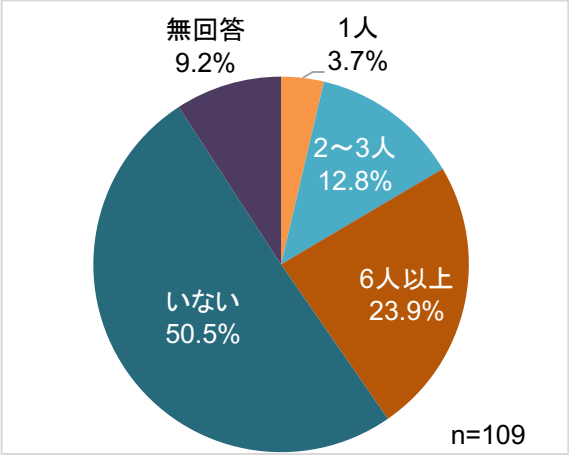
②同じ学校の違う学年のこども

- 「同じ学校の違う学年のこども」については「いない」が 47.7%、「2～3 人」が 20.2%、「1 人」が 11.9%となっている。



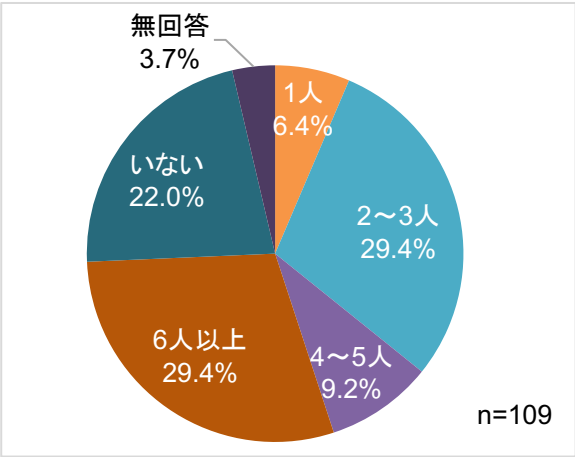
③違う学校のこども

- 「違う学校のこども」については「いない」が 50.5%、「6 人以上」が 23.9%、「2～3 人」が 12.8%となっている。



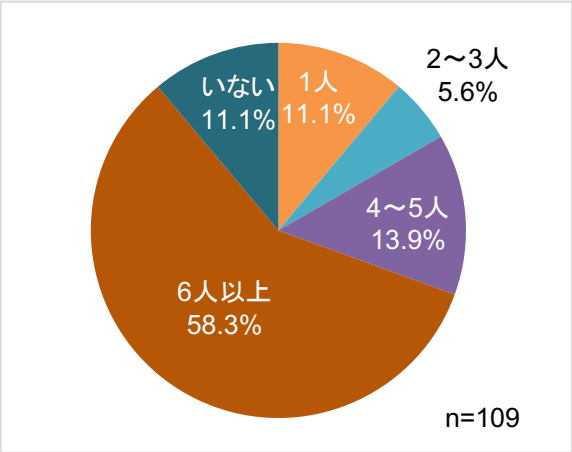
④おとな

- 「こども食堂がきっかけで、話すようになった大人は何人いますか？」という質問をしたところ、「6 人以上」と「2～3 人」が 29.4%、「いない」が 22.0%となっている。



⑤保護者

- 保護者の回答者に「こども食堂がきっかけで、話すようになった人は何人いますか？」という質問をしたところ、「6 人以上」が 58.3%、「4～5 人」が 13.9%、「1 人」と「いない」が 11.1%となっている。



⑥前後比較

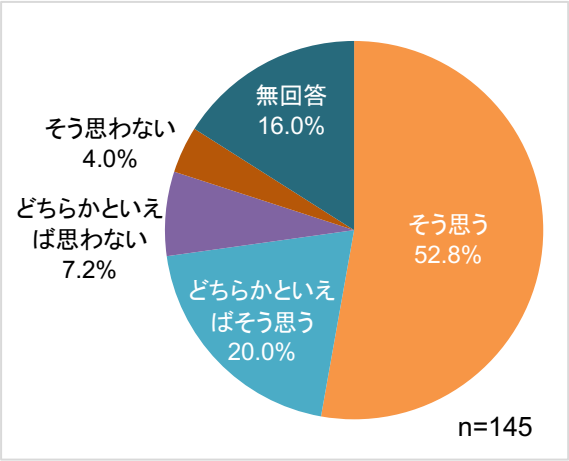
- こどもの回答者で、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「同じ学校の違う学年のこども」、「違う学校のこども」、「おとな」の 3 項目について「いない」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が減少している。

	（回答実数）	1 人	2～3 人	4～5 人	6 人以上	いない	無回答
同じ学校の同じ学年のこども (n=13)	初回	1	4	1	1	6	0
	最終	2	2	2	1	6	0
同じ学校の違う学年のこども (n=13)	初回	0	3	2	1	7	0
	最終	3	3	2	1	3	1
違う学校のこども (n=13)	初回	0	2	0	3	8	0
	最終	1	2	0	2	6	2
おとな (n=13)	初回	0	8	0	3	2	0
	最終	0	6	2	4	1	0

(11) 安心できる場所

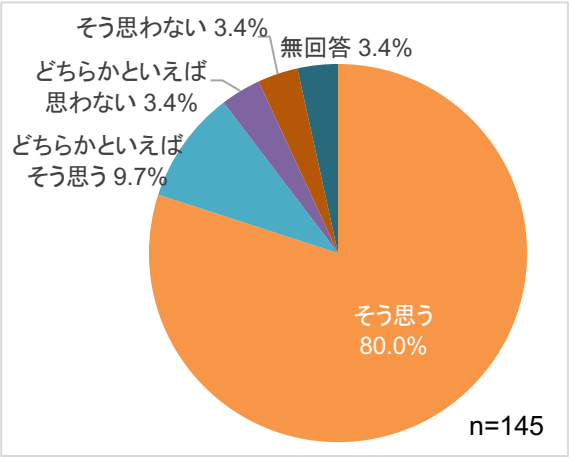
①学校

- こどもの回答者に「つぎの場所は、今のあなたにとってほっとしたり、安心できたりする場所ですか？」と質問したところ､｢学校｣については｢そう思う｣が52.8%、「どちらかといえばそう思う」が 20.0%、「無回答」が 16.0%となっている。



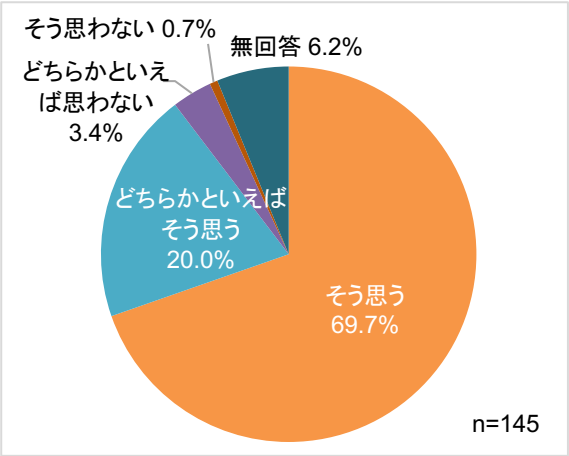
②自宅

- 「自宅」については「そう思う」が 80.0%、「どちらかといえばそう思う」が 9.7%となっている。



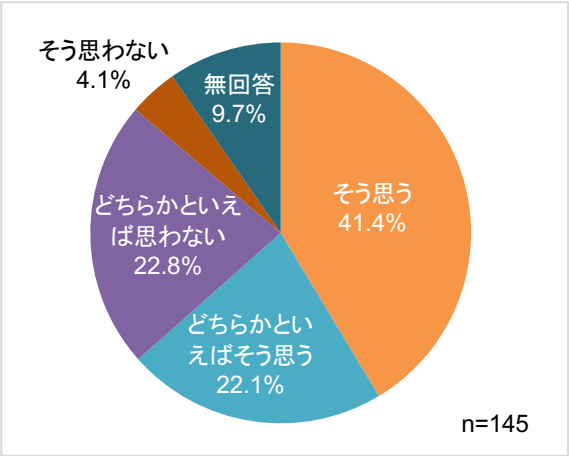
③こども食堂

- 「こども食堂」については「そう思う」が 69.7%、「どちらかといえばそう思う」が 20.0%となっている。



④ちいき（地域にある施設）

- 「ちいき（地域にある施設)」については「そう思う」が 41.4%、「どちらかといえば思わない」が 22.8%、「どちらかといえばそう思う」が 22.1%となっている。



⑤前後比較

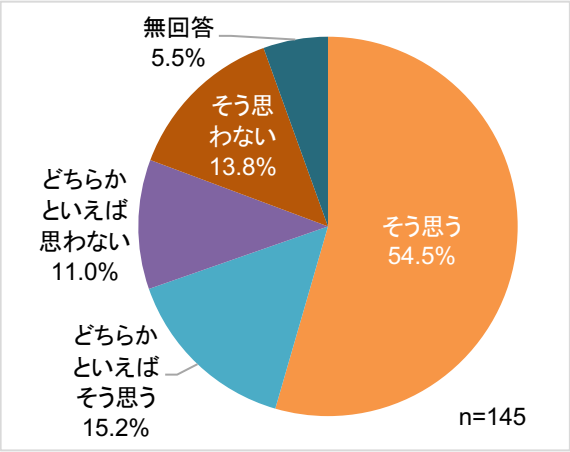
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「学校」について、「初回」では「そう思わない」が３人、「どちらかといえば思わない」が１人いたが、「最終」ではいずれも０人となっている。

（回答実数）		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない	無回答
学校（n=13）	初回	5	4	1	3	0
	最終	8	5	0	0	0
家庭（自宅）（n=23）	初回	19	3	0	1	0
	最終	19	3	0	1	0
こども食堂（n=23）	初回	17	5	0	0	1
	最終	16	6	0	0	1
ちいき（地域にある施設）（n=23）	初回	10	4	5	2	2
	最終	9	3	10	1	0

(12) こども食堂での出会い

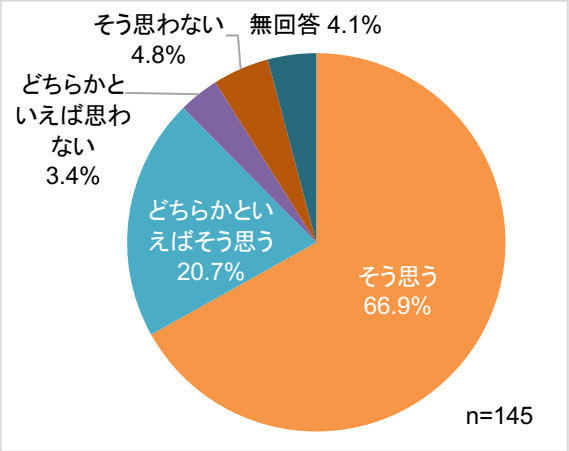
①なんでも悩みを相談できる人がいる

- 「こども食堂で出会った人について、つぎのような人はいますか？」という質問をしたところ、「なんでも悩みを相談できる人がいる」については「そう思う」が54.5%、「どちらかといえばそう思う」が15.2%、「そう思わない」が13.8%となっている。



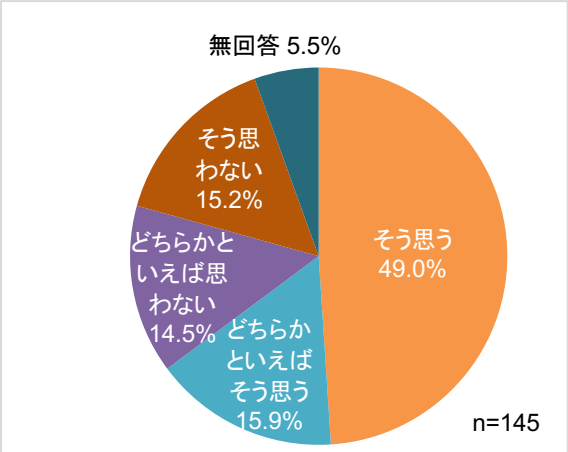
②困ったときは助けてくれる人がいる

- 「困ったときは助けてくれる人がいる」については「そう思う」が66.9%、「どちらかといえばそう思う」が20.7%、「そう思わない」が4.8%となっている。



③他の人に言えない本音を話せる人がいる

- 「他の人に言えない本音を話せる人がいる」については「そう思う」が49.0%、「どちらかといえばそう思う」が15.9%、「そう思わない」が15.2%となっている。



④前後比較

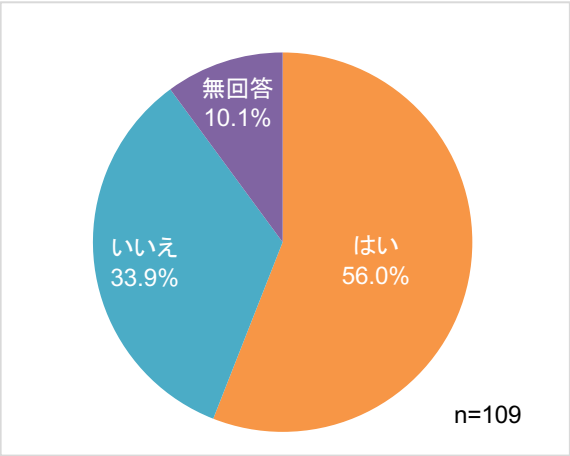
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「他の人に言えない本音を話せる人がいる」について「どちらかといえば思わない」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が増加している。

	（回答実数）	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない	無回答
なんでも悩みを相談できる人がいる（n=23）	初回	15	3	2	2	1
	最終	13	4	3	2	1
困ったときは助けてくれる人がいる（n=23）	初回	19	2	1	0	1
	最終	18	3	1	0	1
他の人に言えない本音を話せる人がいる（n=23）	初回	14	4	2	2	1
	最終	11	4	6	1	1

(13) こども食堂で初めて経験したことはあるか

①こども全体

- こどもの回答者に「こども食堂で初めて経験したことはありますか？」と聞いたところ、「はい」が 56.0%、「いいえ」が 33.9%となっている。自由記述では「音楽ワークショップ」、「げきあそび」、「工作」、「友だちと一緒にごはんを食べたこと」などの回答が見られる。



②前後比較

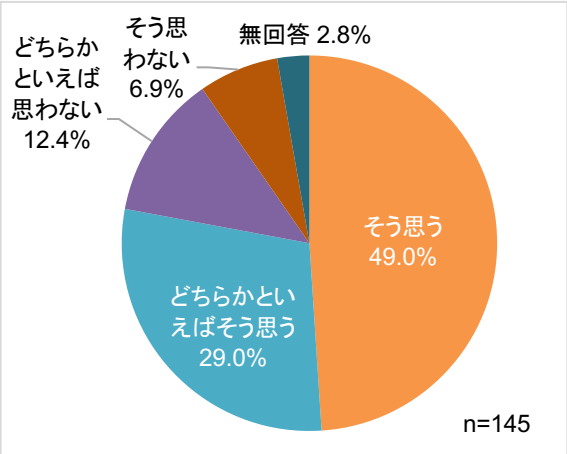
- 「こども食堂で初めて経験したことはありますか？」という質問で、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「はい」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が増加している。

	（回答実数）	はい	いいえ	無回答
こども食堂で初めて経験したことはあるか（n=13）	初回	10	3	0
	最終	12	1	0

(14) 自分自身について

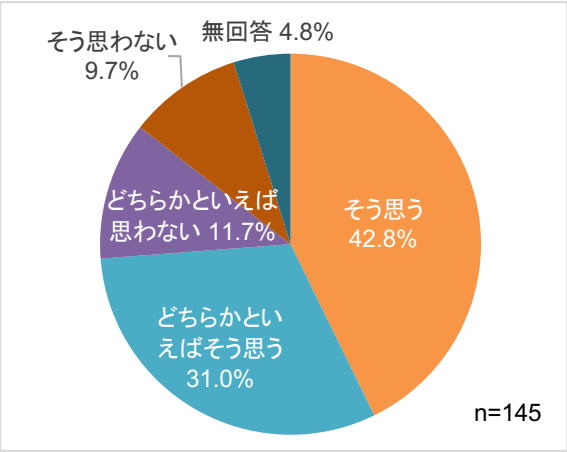
①誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う

- 「次のことはあなた自身にどのくらいあてはまりますか？」という質問で、「誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う」については「そう思う」が 49.0%、「どちらかといえばそう思う」が 29.0%、「どちらかといえば思わない」が 12.4%となっている。



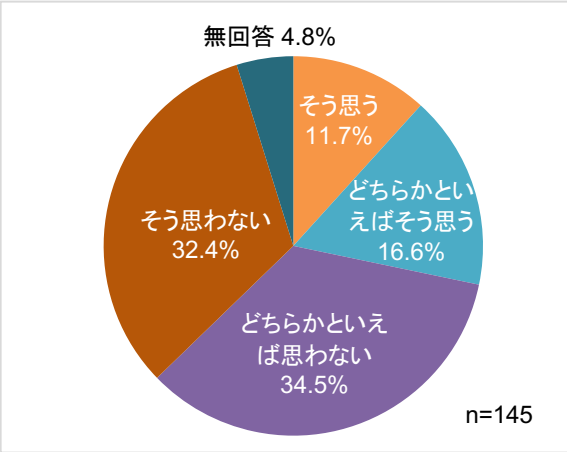
②他人もある程度は信頼できると感じる

- 「他人もある程度は信頼できると感じる」については「そう思う」が 42.8%、「どちらかといえばそう思う」が 31.0%、「どちらかといえば思わない」が 11.7%となっている。



③人は信用できないと思う

- 「人は信用できないと思う」については「どちらかといえば思わない」が 34.5%、「そう思わない」が 32.4%、「どちらかといえばそう思う」が 16.6%となっている。



④前後比較

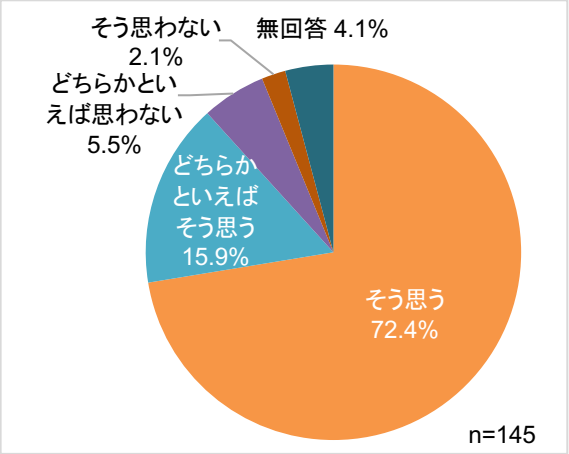
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う」と「他人もある程度は信頼できると感じる」については、「そう思う」とする回答が「初回」に比べて「最終」が増加しており、「人は信用できないと思う」については「そう思わない」とする回答が「初回」に比べて「最終」が増加している。

（回答実数）		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない	無回答
誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う（n=23）	初回	12	7	4	0	0
	最終	13	6	3	1	0
他人もある程度は信頼できると感じる（n=23）	初回	11	8	3	1	0
	最終	12	7	2	2	0
人は信用できないと思う（n=23）	初回	2	4	12	5	0
	最終	3	4	10	6	0

(15) イベントに参加して感じたこと

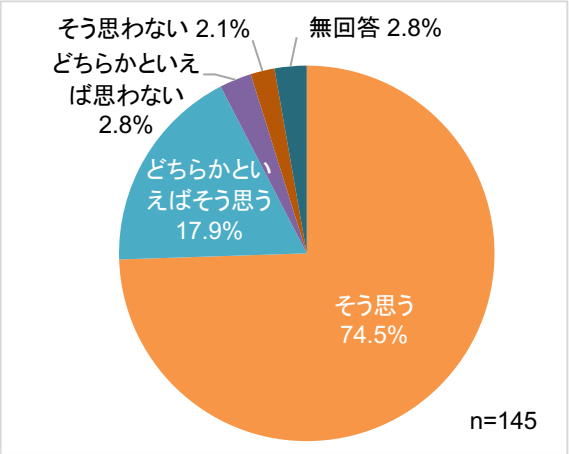
①音楽や美術が身近になり、楽しくなった

- 「今日のイベントに参加して、どんなことを感じましたか？」という質問で、「音楽や美術が身近になり、楽しくなった」は「そう思う」が 72.4%、「どちらかといえばそう思う」が 15.9%となっている。



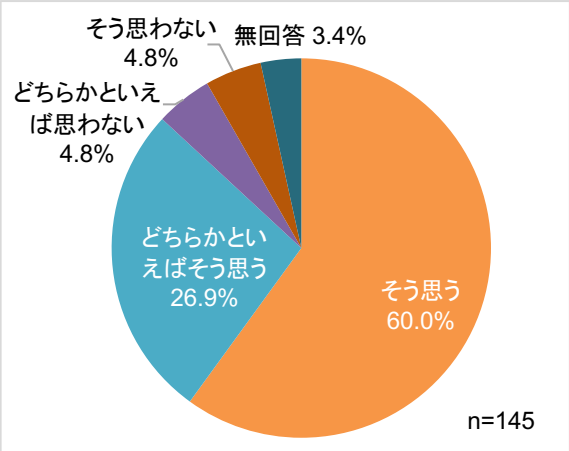
②元気になったりやさしい気持ちになった

- 「元気になったりやさしい気持ちになった」は「そう思う」が 74.5%、「どちらかといえばそう思う」が 17.9%となっている。



③友だちや食堂の人となかよくなった

- 「友だちや食堂の人となかよくなった」は「そう思う」が 60.0%、「どちらかといえばそう思う」が 26.9%となっている。



⑤前後比較

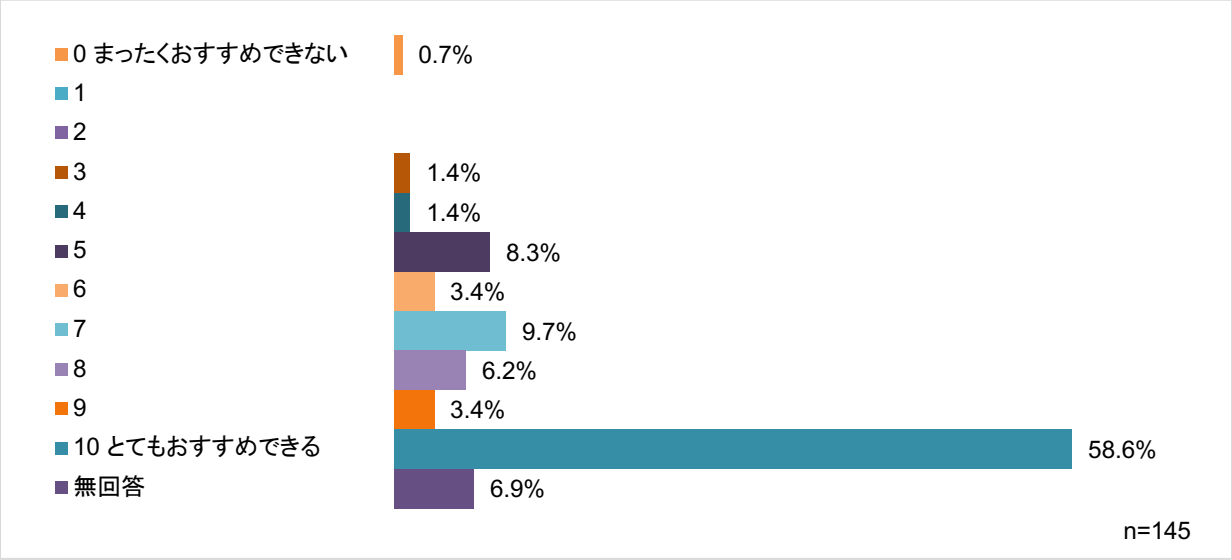
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「音楽や美術が身近になり、楽しくなった」と「元気になったりやさしい気持ちになった」については、「そう思う」とする回答が「初回」に比べて「最終」が減少している。

（回答実数）		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない	無回答
音楽や美術が身近になり、楽しくなった（n=23）	初回	21	2	0	0	0
	最終	19	3	1	0	0
元気になったりやさしい気持ちになった（n=23）	初回	20	3	0	0	0
	最終	19	4	0	0	0
友だちや食堂の人となかよくなった（n=23）	初回	18	4	1	0	0
	最終	18	5	0	0	0

(16) 友だちにどの程度すすめたいか

①全体

- 「今日のようなイベントを、友だちにどの程度すすめたいと思いますか」という質問で、「0 まったくおすすめできない」から「10 とてもおすすめできる」までの 11 項目から 1 つを選択してもらったところ、「10 とてもおすすめできる」が 58.6%、「7」が 9.7%、「5」が 8.3%となっている。11 項目を数値として平均化すると 8.7 点となっている。



- 「今日のようなイベントを、友だちにどの程度すすめたいと思いますか」という質問で、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「10 とてもおすすめできる」とする回答が「初回」に比べて「最終」が増加している。11 項目を数値として平均化すると「初回」では 9.0 点、「最終」では 9.5 点となっている。

（回答実数）		0 まったくおすすめできない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10 とてもおすすめできる	無回答
友だちにどの程度すすめたいか（n=23）	初回	0	0	0	1	0	1	0	1	2	2	14	2
	最終	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	17	1

3. 調査票

(1)児童用調査票

イベントアンケート【子ども向け】

ウェブかいとうもできます

今日のひにち：　　月　　日
性別　：　男　女　その他
誕生日　：　20　　年　　月　　日

あなたについて、あてはまるものに○をしてください。

No	しつもん	かいとう
1	こども食堂にはじめて参加したのはいつですか？	今年から　1年前くらい　2年前くらい　3年以上前から
2	こども食堂に参加した回数	今日がはじめて　2～3回目　4～5回目　6回以上
3	ふだん、音楽や美術などの芸術文化にふれる機会はありますか？	今日がはじめて　年1～2回　年3～4回　年5回以上
4	こども食堂のお手伝いをしたことはありますか？	1回ある　2回以上ある　ない
5	こども食堂がきっかけで、話すようになった子どもは何人いますか？	おなじ学校のおなじ学年の子ども 1人　2～3人　4～5人　6人以上　いない
6		おなじ学校のちがう学年の子ども 1人　2～3人　4～5人　6人以上　いない
7		ちがう学校の子ども 1人　2～3人　4～5人　6人以上　いない
8	こども食堂がきっかけで、話すようになった大人は何人いますか？	1人　2～3人　4～5人　6人以上　いない
9	つぎの場所は、今のあなたにとってほっとしたり、安心できたりする場所ですか？	学校 そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない
10		家庭（じぶんのおうち） そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない
11		こども食堂 そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない
12		ちいき（児童館や公民館など住んでいる地域にある施設） そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない
13	こども食堂で出会った人（友だちや大人など）について、つぎのような人はいますか？	なんでも悩みを相談できる人がいる そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない
14		こまったときは助けてくれる人がいる そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない
15		ほかの人に言えない本音を話せる人がいる そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない
16	こども食堂で初めて経験したことはありますか？	はい　※たとえばどんなことか書いてください （　　） いいえ

うらもあります。

イベントアンケート【子ども向け】

No.	しつもん	かいとう			
17	次のことはあなた自身にどのくらいあてはまりますか？	誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
18		他人もある程度は信頼できると感じる			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
19		人は信用できないと思う			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
20	今日のイベントに参加して、どんなことを感じましたか？	音楽や美術が身近になり、楽しくなった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
21		元気になったりやさしい気持ちになった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
22		友だちや食堂の人となかよくなった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
23	今日のようなイベントを、友だちにどの程度すすめたいと思いますか。点数に〇をつけてください。	0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 まったくおすすめできない ←→ とてもおすすめできる			

今日のイベントについて、意見や感想があれば自由に書いてください。イラストで表現してもらってもよいです。

アンケートは以上になります。ご協力ありがとうございました。

(2)保護者用調査票

ウェブ回答も
こちらから
できます

イベントアンケート【保護者向け】

あなたについて、教えてください。

No	質問	回答			
1	記入日	月　　日			
2	性別	男　　女　　その他			
3	年代	10 代　20 代　30 代　40 代　50 代　60 代以上			
4	あなたの誕生日	月　　日			
5	今日はお子さんと一緒の参加ですか	はい：お子さんの年齢（　　）歳　いいえ			
6	こども食堂に初めて参加した時期	2023 年　2022 年　2021 年　2020 年より前			
7	こども食堂に参加した回数	今日が初めて　2～3 回目　4～5 回目　6 回以上			
8	普段、音楽や美術などの芸術文化に触れる機会がありますか？	今日がはじめて　年１～２回　年３～４回　年５回以上			
9	こども食堂のお手伝いをしたことはありますか？	1 回ある　2 回以上ある　ない			
10	こども食堂がきっかけで、話すようになった人は何人いますか？	1 人　2～3 人　4～5 人　6 人以上　いない			
11	次の場所は、今のあなたにとって、ほっとしたり、安心できたりする場所ですか？	家庭（自宅）			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
12		こども食堂			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
13		地域（児童館や公民館等住んでいる地域にある施設）			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
14	こども食堂で出会った人について、次のような人はいますか？	何でも悩みを相談できる人がいる			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
15		困った時は助けてくれる人がいる			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
16		他の人に言えない本音を話せる人がいる			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない

裏もあります。

イベントアンケート【保護者向け】

No	質問	回答			
17	次のことはあなた自身にどのくらい当てはまりますか？	誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
18		他人もある程度は信頼できると感じる			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
19		人は信用できないと思う			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
20	今日のイベントに参加して、どんなことを感じましたか？	音楽や美術などが身近になり、楽しくなった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
21		元気になったりやさしい気持ちになった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
22		友だちや食堂の人と仲がよくなった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
23	今日のようなイベントを、友人や知人にどの程度勧めたいと思いますか。点数に〇を付けてください。	0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 全くお勧めできない ←→ とてもお勧めできる			

今日のイベントについて、印象に残るような出来事やご意見・ご感想があれば自由に記入してください。

アンケートは以上になります。ご協力ありがとうございました。

V. ヒアリング調査

1. アーティストへのヒアリング

(1)実施概要

実施日： 2024 年 1 月 15 日（月）18:00～20:00
会　場： オンライン
参加者： 古橋果林さん（音楽ワークショップ・リーダー）、柴田英昭さん（淀川テクニック）（美術家）、大熊ねこさん（俳優）
聞き手： 大澤寅雄（合同会社文化コモンズ研究所）
記録者： 川那辺香乃、馬渕悠美

(2)意見要旨

①関連プログラムの実績

- 音楽ワークショップをメインの活動としていて、普段は劇場やホールが主催する音楽ワークショップ、小学校や保育園、幼稚園、それから高齢者向けの音楽ワークショップを行ってきた。（古橋）
- 2003 年頃から海ごみや川のごみを使って立体作品をつくる活動をしている。2005 年ぐらいからワークショップをやってくださいと言われるようになり、大学生にワークショップを行う授業をやったり、他の様々な場所にも呼ばれればワークショップをしたりする活動を行ってきた。（柴田）
- 演劇の俳優が主な本業で、演劇で大事にしている人との関わりや身体活動を、こどもたちやあらゆる広い年代に向けて、コミュニケーションのひとつの手段としてワークショップでご紹介して、遊びの時間をつくるという活動を俳優業と並行して行っている。（大熊）

②プログラムへの期待

- 昨年も同じこども食堂で行って、シンプルに、音楽を全力で楽しむということにフォーカスを当てて、そういう活動を通して食堂を安心できる居場所だと感じてもらえたらと考えていた。昨年の音楽ワークショップで「バンドの練習の休憩中のようだった」と言っていただいたのが心に残っていて、今年は食堂に集うこどもたちがひとつのバンド的な雰囲気にもっと近づけていけるとよいなという期待をしていた。（古橋）
- 作品をつくることも大事だが、つくっている時に何を考えているのかを非常に聞きたい。単独でつくったり、周りの人と話したりながらつくり、その後で「それはなんやったん？」という感じをみんなで共有するのが非常に大事に思っている。（柴田）
- ブラジルにルーツを持たれるご家族が集まられるこども食堂なので、日本の学校に行ってはいるけれども、言葉の壁で、学校で意思疎通ができないこどもたちや、大人たちも日常的に職場などで日本の方との意思疎通がうまくいかない人たちが多く集まっていた。日本の人たちとも楽しい時間がつくれるよというひとつの自信やきっかけになればというお話を最初に伺った。いかに楽しく、安らげる時間をみんなでつくることにフォーカスを当てて、多くは求めずに、どうしたら楽しくいられるかを提案しに行くということを、毎回ワークショップの目標にした。言葉の壁はあったが、「私たちには体がある」ということが前提で、言葉が伝わらなくてもジェスチャーやボディランゲージなどできっと繋がれるはずだという確信はあった。（大熊）

③こどもの居場所へアーティスト派遣することの価値

- お母さんと一緒に参加してくれている未就学児の女の子がいて、お母さんから聞いた話。その女の子が、お風呂の中でおもちゃのボールか何かを壁に投げて、跳ね返って浴槽のお湯の中に入り、その音を「ママ、今のって、ドン、チャッ、ポンだったかな」と言葉にして確認することがあったそうだ。音楽ワークショップを通して、日常にあふれる音も捉え方によって面白さが生まれたり、そこから音楽が生まれたり、誰かと共有して音や音楽を探求するということが、ワークショップ以外のところでも起こったりしていると思った。（古橋）
- 2 年目の音楽ワークショップで、昨年も経験した子が初めて参加した子に対して、直接「誰かこの子に教えてね」とか「僕が教えるよ」という空気よりは、「この音楽ワークショップは、こういう場なんだよ」

という、どのような参加の仕方も認める空気感があった。1人ひとり、自分が好きな形で参加してよいという空気感を、特に連続して参加してくれる子たちが、本人たちは無意識かもしれないが、積極的につくり出していってくれているような気がした。（古橋）

- 作品をつくっている時の、友だちとの関係性を僕に自慢してくれたことがあった。外から見ると人の作品に手を出すのを嫌がる子もいるし、学校の工作の時間でやると逆に「やめなさい」と言われてしまうと思うが、それを彼らは面白がっていた。僕は今までものづくりのワークショップを提供しているつもりだったが、ものづくりの中から生まれる関係性も少し拾えたと思う。（柴田）
- 言葉が伝わらないのはお互いさまで、みんなはポルトガル語で生活しているわけで、気を使ってポルトガル語と日本語を使い合うよりも、もっと関係がフラットにならないかと考えた。その上で、いかに無理なく、楽しく、ありのままでいられるかということを、ゲームの中で提案していこうと。（大熊）
- その中で言語ではなく体と場所を使って、かき回して、なんとかお互いがただの人間同士の楽しい時間にいかにできるかを非常に考えた4回だったと思う。4回目には日本語とポルトガル語が同時にワーッと行き交っている時間が起きていた。それが「ああ、やりたかったことだな」と思って非常にうれしかった。振り返りで田中さんと「ありのままでいられるということが一番大事ですよね」ということを共感できたことが、私の一番の糧として残っている。（大熊）
- こどもと一緒のほうが大人の方も乗りやすくなる。大人が頑張るとこどもたちも喜んでくれるし、大人がこどもと一緒にいることで、お互いが乗り越えやすくなったという感じがした。大人が「ちゃんとしなさい」などと言っていると、逆に空気が悪くなるという感じが伝わったのか、少しふざけて、枠をはみ出てしまうこともその人の表現で、むしろそういう時間を私たちは待っていたのかもしれないという感じがした。それは相乗効果で、お互いが「ああ、それでいいんだ」と思ってくれていると感じた。（大熊）

④実施に向けた課題

- チームづくりのところで課題を感じた。去年と今年と堺市新進アーティストバンクに登録する3人のアーティストが私と一緒にやっていくスタイルで、2年間で6名のアーティストが関わってくださったが、ほとんど音楽ワークショップの経験がなく、人間関係も「はじめまして」からスタートで音楽ワークショップを一緒につくっていくのが、面白い作業でもありつつ、やはり少し難しさも感じるところだった。（古橋）
- アーティスト自身も回を重ねるごとに、私が思っていることを汲み取ってご自身の個性を出してくれる方もいて、大変面白い化学反応が起きていると思う時もあった。その反面、私は音楽ワークショップとはなんだろうということをうまく共有できていないと思う瞬間や、ワークショップの有り様を一緒に探すことが難しい時もたまにあった感じがする。（古橋）
- 食堂スタッフの方が丁寧に参加者の募集をかけてくださって、本当に密なコミュニケーションが大変ありがたかった。それがあったからこそ見えたこどもたちの様子もあったので、ありがたいと思う反面、負担としてはかなり大きかったのではないか。持続するためにどのような形がよいのだろうと考えた。（古橋）
- 最後の回で「美術館」という設えにして、みんなのつくったものを見せて共有する場をつくっていただいた。もう少しこうしたほうがよかったと思うのは、もっとこども目線でうまく話を聞いてあげるということ。つくるのは好きだが話すのは苦手だとか、結局自分は何をつくったのか分からないという子も中にはいるけれども、何かこだわっているなというのは見ていて分かったりする。「これは何をこだわったのだろう？」ということをうまく聞き出すテクニックは、改善の余地があったかなと思っている。（柴田）
- 4回というのは本当にあっという間で、いわゆる演劇ワークショップでやるような最後の発表のようなみんなでひとつのものをつくり上げることを目指した場合のスタート地点に、4回やってやっと立ったかなというぐらいの雰囲気かと思っている。ここから何かひとつのものをつくっていくということは、また違う難しさがあると思う。逆に、4回を使って「お互いの信頼関係をつくろう、自分を大事にしよう」ということをじっくりやらせていただいた、ご理解をいただけたことに感謝したい。（大熊）

⑤広く展開するための留意点

- 「音楽ワークショップとはこういうものだ」と決まっているというよりは、むしろ、どのような人が集まっているか、どのような場所かによって構成や内容を組み替えて合わせていくものだと思うので、ある意味どのような場所でも実施可能なのではないか。（古橋）

- この 2 年間ワークショップを行ったが、想定していたことを途中で軌道修正して、財団の皆さんと話し合い、方向性や目標を捉え直したことがあった。そういう意味でもトライ・アンド・エラーを繰り返す要素も大きいと思う。だから、トライして、エラーして、それも面白いと思いながら、次に繋げられるものかと思っている。（古橋）
- 時限爆弾のような感じで記憶の片隅に残っていて、例えば大人になった時に、突然「そういえばあれは面白かったな」と思い出して、そこから影響を受けた何かを始めるようなことが起こったら面白いと思う。そういう意味では、すぐには結果を求めずに、いろいろな揺さぶりをかけて、普段の食堂の中では得られないような体験があると、何か記憶のどこかに入っていたりすると思う。（柴田）
- アーティストにはアーティストの世界の変え方のようなものがあり、普通の日常生活にはない世の中の見方を、いつの間にか教えてくれる。それがワークショップの意味なのかなと思う。だから、そういう大人としてアーティストたちがひとつの場所に来ると面白いと思う。（柴田）
- アーティストと参加者がお互いに、フラットに人としてきちんと関わり、その表現をリスペクトし合えるか、認め合えるか。それが表現のスタートだ。それがあることで安心して自分を大事にして誰かに対して開いていけるということを体験してもらえる時間になるとよい。教える・教えられる関係にならず、どこかおかしくて、「こんな人間がいるんだ」というような感じの出会いをつくっていけたらいいなと思う。（柴田）
- 演劇は「人と関わってなんぼ」なので、相手に対してはまる・はまらないの前に、まず自分という存在をまな板の上に出して「これで生きていっているんだよね」と提示することから人間関係が始まると思うし、そういう態度を見せてあげるのがアーティストのひとつの役割だと思う。 普段からそういう関わり合いがうまくいっているところも、もちろん楽しいが、意義としては、そういう関わりを提案できるような場所に行くのがよいのだろう。（大熊）

⑥アーティスト派遣の可能性

- 僕の周りにも不登校のこどもが大変多い。学校のやり方になかなかそぐわない子たちもいる。そういう子たちでも参加できるような、いつもとは違うきっかけから自分の価値を見つけて、自分の目線を発見する機会になると思った。（柴田）
- （今回のこども食堂でのワークショップが、日頃の芸術活動に返っていくようなものがあると実感するところがあるかという質問に）かなり直結していると思う。「私の軸はここなのだ」という原点に帰った感覚を、改めて今回確認させていただく機会を得たので、より私の創作活動にきちんと生きていると実感したワークショップになったと思っている。（大熊）
- 自分の中でも非常にフィードバックがあった。ワークショップをする時にプランを自分は出しているが、こどもたちはそうではない答えを毎回出してくる。最終的に出てきた結果を見て「これが答えだったのだな」と考える。そういう機会になったと思っている。（古橋）

2. 食堂スタッフへのヒアリング

(1)実施概要

実施日： 2024 年 1 月 12 日（金）10:00～12:00
会　場： フェニーチェ堺　小スタジオ C
参加者： 古藤一彦さん（いづはまスマイル食堂）、谷岡裕喜さん（にしのこまんぷく食堂）、田中ルジア みやさん（PROJETO CONSTRUIR）
聞き手： 大澤寅雄（合同会社文化コモンズ研究所）
記録者：馬渕悠美

(2)意見要旨

①関連プログラムの実績

- 堺区の大仙西校区で、にしのこまんぷく食堂を運営している。普段は月 1 回のこども食堂の開催で、毎回大体 80 から 100 ぐらいのこどもたちが来てくれている。文化振興財団と協働して文化的なことをこどもたちに伝えていく取り組みは、今年で 3 年目。1 年目はミュージカル、2 年目コンテンポラリーダンスで、今回は漂着ごみを使った創作アートに取り組んだ。（谷岡）
- 西区の浜寺東校区にある、いづはまスマイル食堂で代表をしている。この秋で 5 周年を迎え、6 年目に入った。1 回に 100 人から 150 人ぐらいが来てくれているが、月に 1 回程度から始めて、コロナ禍になって活動の幅がぐんと広がった。文化振興財団から声をかけていただいたのが 2021 年。3 年前にブロックプリントというインドの染色のアート活動が初めてで、2 年前と今年度は引き続き音楽のワークショップをしていただいた。（古藤）
- PROJETO CONSTRUIR は去年 15 周年になった。こどもたちはブラジルにルーツを持っているこどもがメインで、堺市だけではなく府のいろいろな町から来ている。こどもだけではなくて大人も、お父さんかお母さんか、または両方参加する。私がブラジルで大学を卒業した大学で私はアートエデュケーションを学んでいた。秋の発表会をやって、ファッションショー、マジック、ポルトガル語での演劇、朗読などを行なった。（田中）
- 15 年間でやってきたものは秋の発表会を 3～4 回ぐらいやって、そこではこどもたちに舞台で自分たちがやりたいことをやってほしいと思っていた。学校に行って、先生が質問しても手も挙げられないぐらい恥ずかしい。それは、自分が日本語を話すとみんなが笑ったりするからだ。同じブラジル人でもいろいろな違いがあるから、表現をすることで、隣に座っている友だちのその違いを尊敬してほしい。（田中）

②プログラムへの期待

- 表現や人間を尊敬することなど、自分たちが今までやってきたことにとてもプラスになっている。アーティストも財団の皆さんも一緒に来てくれて、大人も一緒にやって、自然にみんなが友だちのようになった。多分今年の発表会の時にとても役に立つということと、学校の中でも自分を「できる」と、言葉ができなくても「なんでもできる」という力を少しでももらえたのではないかなと思っている。（田中）
- うちのこどもたちは結構内弁慶というか、恥ずかしがり屋で、でも打ち解けたらとても親しくなれるこどもが多い。やはり打ち解けるまでの時間や、連続でやってもらう点がアーティストにもご負担をかけただろうと思っていた。（谷岡）
- いろいろな施設や地域の方が協力もしてくれて最終的に展示をしたのだが、こどもたちもその展示をとても楽しみにしていて、「ここに置きたい」という強い思いを出してくれているこどもたちもいた。期待していた点と今回は本当にリンクしたということが、スタッフみんなの共通した率直な認識だ。（谷岡）
- 同じアーティストでの 2 年目のワークショップで、単なる参加者として楽しいから来ていた子たちの中から、少しスタッフとして関わるような子が出てきたらいいなと期待していた。こども食堂の登録者の数から言えば、音楽ワークショップに来る人数はわずかだが、期待どおりに、その子たちは音楽ワークショップ通して自分の居場所を見つけて、自分よりも小さい子たちの面倒を見てくれた。また、アーティスト

との関わり方も単なる参加者ではなくて、「少しお手伝いさせてください」、「ありがとう。助かるよ」といった関係で、こどもたちがやりがいを感じるような1年になっていった。（古藤）

③こどもの居場所へアーティスト派遣することの価値

- ある中学生が「日本語とポルトガル語は大変だから、誰かが通訳をしたら」と言ったけれども、やりながら、結局誰もどちらの通訳もしていなかった。年も小さいこどもから大人まで一緒にやっていて、壁も何もなかった。ここに来たら本当に何も壁がないなと、誰も何も言っていないけれども、それが見えていることがとてもうれしい。（田中）
- 自分の将来を聞かれたこどもたちは、「将来は暗い」などと、とても悲しいことを言う。でも、アーティストがやってきて「このような仕事もできる、自分がやりたいこともできる」ということを体験できたことは、言葉にはまだなっていないけれども、とても大切だったと思っている。（田中）
- 日本人になればうまくいくと家族も思っている。でも、自分らしく生きていくことが一番大事なので、多分この4回で、大熊さんとみんながお友だちになって、多分初めて日本人と同じ立場になって、冗談を言ったり、遊んだり、真面目に考えたりした。それが続いたら多分もっととてもよい結果が出るのではないか。（田中）
- 一番大きな変化で言うと、こどもたちの、校区の中にある施設、建物への親近感がさらに大きくなったと思っている。逆に施設の職員さんたちのこどもたちへの親近感というものも、今回の活動で湧いたのかなと思っている。（谷岡）
- 展示物への関心もとても高くて、芸術祭という形で地域の中に展示をしている間に「あそこのこれが壊れていたよ」といったことをこどもたちが言いにきてくれた。（谷岡）
- 施設の方たちも「何を置くのですか」となった時に「アート作品です」という話をしたら、「なんでアートなのですか」となる。ここからはスタッフも含めて自分たちの変化にもなるのだが、今まで2年やった時はなかなか「なんでコンテンポラリーダンスなのですか」、「なんでミュージカルなのですか」と聞かれても、なかなか言葉に詰まってしまう自分たちもいた。ところが今回は「“ゴミジナル”というごみを使った作品で、こどもたちがこういうことに関心を持って、こういう活動をするのです」と説明がしやすかったのが、今までとの変化のひとつ。（谷岡）
- 普段どおりの関わり方に変化があったかという話で言えば、変化とまでは言えないかもしれないが、「これは何でこのような物をつくったの？」と聞いたら、「適当」と、そういうやりとりは普段からあったのだが、「ゲームでこのような物を見ているから、ゲームでこのような物を使っているから」といった、創作物を介した普段の日常生活の細かい背景が聞けたということは、今回の活動で大きかった。（谷岡）
- 例えば60分、長い時は90分の音楽ワークショップで、耐えられない子もいる。その子たちが途中でワークショップの部屋の下の階に下りてくる。その子たちに「ちょっと来て。綿菓子をつくってくれ。もうすぐ下りてくるからたくさんつくりだめをしておいて」といった関わりなどができた。音楽ワークショップだけを目的にせずに、そこから溢れてしまったり入り切れなかったりするこどもたちを、こども食堂側のスタッフが拾ってフォローしていくことができていた。（古藤）
- 中学生の男子でひとり、非常に物静かな男子がいて、先日、その男子はワークショップ終了後のスタッフの反省会にずっといた。特に発言するわけでもなく、大人の反省会のような所が好きなようだ。そういう関係性もよいと思う。こどもたちが普段は出会わないような大人に出会っている。しかも、それが結構ハードル低く出会っていっているというところがよいと思う。（古藤）
- 去年であれば、ただ自分が楽しむものの、恥ずかしい、面白くないとなったら少し違うことをしてしまっていたような子たちが、役割を与えられたことによって、小さい子たちが入れるように見守っている姿がよくあった。（古藤）
- コロナ禍からうちを知って入ってきた人が増えたので、弁当だけの参加から、このワークショップをきっかけに、新しくみんなで集まる会に参加する家族が出てきた。ワークショップをきっかけに、「ここでこのような物を食べていいのだ」、「ここでこのように過ごしていいのだ」ということを分かってくれて、今後も会食にどんどん参加してくれそうな家族が結構出てきている。（古藤）

④実施に向けた課題

- 課題はそれほどないと思う。ただ、4回で終わることが残念だと思う。そこが、結果を何かもう少し見たかったら、もう1回か3回ぐらい、3年ぐらいやらないと。何かみんなで見える物を最後につくったらうれしいと思う。（田中）

- 言葉の壁は多分なかったと思う。日本人と外国人が一緒になって、どこに行っても多分お互いに不安がある。でも、ジェスチャーをたくさん使う内容だったから、同じ人間だからその壁が本当に薄くなったと思う。一番心配していたものがすぐクリアできた。（田中）
- 課題で言うと、僕たちはほとんど地域の施設などとの調整といったことばかりだったが、施設の人たちがどれだけ参加してくれるかというところだ。今後はどうやってこういう活動に他の人たちを巻き込んでいくか、自分たちだけではなくて地域の人たちを巻き込んでいくかというところが課題だと思っている。地域にある施設の人たちで「地域のこどもなのだから、みんなで見守りましょう」ということをずっとやってきている地域柄だった。僕らもそうやっていろいろな大人のお世話になってきたので、その感覚が残っていると思う。（谷岡）
- 非常に正直に言うと、多分食堂側が無理のない形は、あまり想像がつかない。私たちの場合は、調理が簡単なものに限ったので、「弁当の準備を簡単にして、こちらをメインで行こう」ということにして、調理と同時進行でワークショップをやる時間帯を取っていた。だから負担はそれほど大きくなかったとは思っている。その辺りで言うと、食堂側に負担や無理のない形というは、なかなか難しい。自分たちにも負担のない、お互いに負担のない形はどうやればよいのか、ずっと話には上がっている。（谷岡）
- 親子参加をしたい人たちや、「まだ弟、妹が小さいのですが、いいですか」といった人たちもやはり断りたくなかったこともあり、結果的に年齢の幅が広がって、去年より今年度のほうが小さな子が増えていった。それは難しかったのではないかと感じた。（古藤）

⑤広く展開するための留意点

- 地域の日本人とは何もできていないのがとても残念と思っている。アーティストが来ることができたら、学校に言って場所を借してほしいということを話しかけられるのではないか。アーティストとワークショップをすることをきっかけにこども会にも声をかけられるのではないかなと思っている。（田中）
- 一番困難なことはお金の面だが、続けてほしい。自分の団体ではなくても、いろいろなこども食堂にそれを体験してもらいたいと思う。1 回やって非常によい影響を与えてもらったから、その気持ちを他のこども食堂にも回したほうがよいのではないかなと思う。（田中）
- こども食堂は、それぞれにいろいろな背景があったり、いろいろな人柄があったり、いろいろな地域柄があると思うので、その職員さんがどのようなことを大事にしているかで、その地域がどのような感じなのかであったりというところも含めて打ち合わせなどを進めていくことができれば、「では、ここにはこのようなアーティストさんがいいですね」というところまで行くことができるのではないか。（谷岡）
- アーティストにワークショップの日以外の日に来ていただけたことはありがたいし、素の状態のこどもたちと触れ合ってもらえることと、音楽ワークショップに参加していない、「宿題しよう会」だから来た子とも関われる。多分そこで「初めまして」もあったと思う。そういうことを今回は提案していただき、日程調整は大変だったのだが、5 回プラス α で動いていただいて良かったと思っている。（古藤）

⑥アーティスト派遣の可能性

- 来てくれたアーティストがどのようなことをやっているか、それも見せたらよいのではないか。アーティストだということは知っているけれども、こどもには、もっとその方がやっている活動を見せたうえで来てくれたら、多分やる気持ちも大きくなるのではないか。どうしてこの道を選んだのかということなどを少しだけ入れたら、もっとよいのではないか。（田中）
- 私たちが体験したものを自分たちでどのようにできるか、それを考えて、アドバイスしてくれるアーティストを紹介してくれたら、あとで自分たちでもやっていけるのではないか。（田中）
- 今回、柴田英昭さん（淀川テクニック）が教科書に載っておられる方だということで、実際に他の作品も持ってきてくださった。こどもたちは教科書で見ている人だからということで「なんてすごい人なのだ」と、まずはそこが紹介できたことが良かったと思っている。アーティストの本気の作品などを見てもらうということはこどもの刺激になったと思う。（谷岡）
- 社協（堺市社会福祉協議会）と財団で、例えば「このようなアーティストがいるけれども、どこのこども食堂に合いますか」いったことは、やりとりはあるのか。社協はネットワークの事務局をやっているから、ある程度、それぞれのこども食堂の目的、背景や地域柄などの情報を持っていらっしゃる。そこでやりとりができれば、もっと広まっていくのかなと思う。（谷岡）
- 中にはこどもの発達の度合いや多動症などを抱えている子も何人かいて、ワークショップの時も「あまりそちらには行かないで」という所に行って、それをお母さんがひたすら追いかけることがある。お母さん

の気持ちを考えたら大変だと思う。それでも、そのお母さんは頑張って何回も連続で来てくれた。「どのような子が来ても受け入れますよ」という思いはアーティストも財団も持ってくれている。僕たちもそう思っている。けれども、お母さんが、どこに行ってもその子のことを追いかけ回している。だから「ここではそれはしなくていいですよ」と言ってあげられるような場所になっていきたい。（古藤）

- いろいろなタイプのアーティストが複数人来てくれることによって、いろいろなこどもをフォローしてくださっているということがあった。一概に「これがいい」とは言えないけれども、ひとりで来てくれてもよいし、複数人で来てくれてもよいと思う。（古藤）

令和 5 年度「子ども食堂における芸術家派遣事業」
事業検証調査　報告書
令和 6 年 3 月
合同会社文化コモンズ研究所

KEIRIN 競輪の補助事業
この報告書は、競輪の補助により作成しました。
https://jka-cycle.jp